白梅学園短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　№10　24～47（2005）

保育・幼児教育の研究の動向
――二つの学会誌10年間の動向の分析――

塚崎京子　無藤　隆

問題

「保育学」の動向を，保育学自体の成立と変容という視点から検討したい。保育・幼児教育を対象とする研究の学問としての成立を近年の研究動向をとらえる中で取り出したいのである。

そもそも，保育学という分野が他の教育や発達などを対象とする学問と比べ，学としてのあり方が未熟であることは否めない。だが，その未熟さは保育現場とのつながりの深さに由来することでもあり，まったく否定的なこととは言えない。しかし，従来，ともすれば，心理学や教育学の保育とは直にはつながらない学問の知見を保育の実践の検討に持ち込んだり，あるいは，保育実践と関わりの薄い知見をそのまま「保育学」の一環をなすものとして提示してきた面もあった。その反省は，おそらくこの20年ほど特に顕著に学界のリーダー層とともに，意欲的に研究を進める中堅・若手の研究者に共有され，検討が進められてきた。

とはいえ，一般論としてそういった動向を述べることを越えて，実際に保育現場に関わる広義のデータや資料を基に根拠のある考察を展開することは容易なことではない。何人かの先駆的な試みを頼りにしつつも，また，他分野の業績に学びつつも，地道に少しずつ従来の方法論や理論枠組を拡大し，保育の場に応じた適用を行っていかねばならず，それには10年を越えた時間と数多くの研究者による学界での協同的な取り組みが必要となる。

本論文では，その取り組みの進展を解明するために，二つの学会誌に注目し，年次ごとの変容を検討したいのである。もとより，多くの著作や紀要等を通した研究活動が活発に行われているのであるが，その全容の解明は現在の我々の手に余る。まず，学会誌の論文の検討を行うことで上記の目的に進みたい。また，とりあえずは最近の10年間を取り上げ，次のところでさらにその前の時期に遡れればと思っている。

方法

学界の主要な学会誌2誌「保育学研究」（年に2冊刊行）と「乳幼児教育学研究」（年に1冊刊行）を過去10年間総覧し，そこでの論文を幾つかのジャンルに分けてそれぞれの論文の発表年，発表誌，ページおよび，およその内容がわかるように概要をつけた。紙幅の制約上，結論を十分に紹介できていない部分があることを断っておきたい。

今回取り上げた論文は合計277本である。これらの論文を概観し，分類するに当たり，佐々木（2004）の「児童心理学の進歩　第7章　保育・幼児教育」を参考にした。佐々木は，過去5年くらいまでを射程に入れて保育・幼児教育に関する文献紹介を通して，発達の可能性について言及している。ここでは，Ⅰ．保育の質と保育者の専門性　Ⅱ．幼児期の発達をとらえる　Ⅲ．子育て支援　Ⅳ．多文化保育　に分類され，それぞれの項目ごとに近年の保育をめぐる研究が紹介されている。既にこのような論文が存在することから，今回は別の角度から概観して分類することを試みた。保育学研究は，この10年間で11回の特集を組んでいるため*特集のテーマに沿ったタイトルの論文がおのずと多くなっている。しかし，題目においては特集号のテーマを意識した論文にも，幾つかの方向性を持っているものが少なくなく，今回は独自の分類に当てはめてみることにした。

その結果，1995年から2004年の10年間に「保育学研究」と「乳幼児教育学研究」に発表さ

れたすべての論文（1997年35-1日本保育学会50周年記念に掲載された論文はインタビューや回顧であることから今回の資料からは外した）は，次の5つのジャンルーⅠ．実践現場の様子の分析　Ⅱ．保育者の力量と成長　Ⅲ．発達的な視点に立った教育内容の分析　Ⅳ．保育の今日的課題　Ⅴ．保育の歴史研究　に分類され，「資料：保育・幼児教育の研究の動向－二つの学会誌10年間の動向の分析－」としてまとめることができた。

本稿は，この資料の解説とそこから見えてきた今日的な研究動向について言及することを目的とする。

*「保育学研究」特集のテーマ：1995年33-1乳幼児の発達と保育内容　1996年34-1保育の質を高める実践研究　1997年35-1日本保育学会50周年記念　1997年35-2園生活と安全教育　1998年36-1幼児の音楽表現と保育　1999年37-1幼児の多文化教育　2000年38-1幼児の成長と人間関係　2001年39-1保育者の専門性と保育者養成　2002年40-1幼児期の家庭教育　2003年41-1遊びと学習　2004年42-1人的環境としての保育者

Ⅰ．実践現場の様子の分析

この項目は，さらに，Ⅰ－1．園の環境（Ⅰ－1－1環境としての保育者，Ⅰ－1－2物的環境）と，Ⅰ－2保育の中のやり取り（Ⅰ－2－1人間関係，Ⅰ－2－2身体の働き），に分けられる。我が国の保育の特徴は，園の環境に事物を配置し，そこに子どもが関わることを保育者が援助することにより，成長を促すという形をとる点にある。そこで，一つは保育環境の記述と分析が重要となる。保育者（人的環境）と遊具や自然（物的環境）が注目される。保育者のあり方やかかわり方，また，園にどのようなものがあるかということから，その対象と子どもの関わりの活動の記述，さらにそこからどのように子どもが活動に熟達していくかに関心が発展している。保育者がどのような言葉を掛けて働きかけるか，また，子ども自身がいかにまわりの子どもや保育者に関与しようとするかなどに着眼した保育の中のやり取りの研究においては，実際に保育の現場を観察し，そこで，子ども・保育者が対象に対していかに関わるかの詳細な過程を分析する。さらに，その中の保育者の微妙な内的感覚や，子ども・保育者の身体的動きにまで微細な分析を進め始めてもいる。単に分析が細部に渡るというより，幼児期を身体的な対象との関わりの時期であるととらえ，観察資料でその様子を把握しようとしている。

Ⅱ．保育者の力量と成長

保育者の学び方などに注目した研修やカンファレンスのあり方や，保育者の特性について，また，ベテランの保育者の智恵に学ぶという意味で，その経験年数の比較などが取り上げてられる。さらに，保育の質の向上を求めて保育尺度案を作成したり，保育者養成にも注目して質の高い幼年教育の実現の方向性などを検討している。これらの研究は次第に増加しつつあり，保育の本当に難しい微妙な要点に近づきつつある。

Ⅲ．発達的な視点に立った教育内容の分析

この項目は，1．遊び・学び　2．言葉　3．表現（音楽・描画）　4．認知・自己と他者・社会　5．道徳・思いやり　6．幼児教育・保育過程　7．健康・運動・身体・栄養・発達病理　の分野に分けられる。遊び・学びでは，遊びを通していかに学びが成り立つかに注目がある。表現の領域では，音楽や造形などが単に小学校以上の発達や指導のあり方を幼児期に降ろすのではなく，この時期の固有のあり方は何かという問い掛けが増えてきた。認知の発達では最近，人間関係や自己の認知の問題が保育にとって意義のあるものとなっている。道徳性が幼児期にいかなるものとしてあり，その芽生えが小学校以降の道徳へといかに発展するのかは重要な課題になりつつある。子どもの活動・保育者の指導・クラスとしての子ども集団の関連的な営みを保育過程としてとらえ，保育の方法のあり方について考察している研究や，

幼児期の健康管理や運動することの意味などに着眼し，身体機能や病理の面から発達をとらえた研究もされている。以上，発達的な視点が幼児期の保育の指導と密接につながり，保育場面という固有性の元で教育内容をとらえ直す思考が顕著である。

Ⅳ．保育の今日的課題

この項目は，1．子育て支援　2．統合保育　3．ジェンダー　4．虐待　5．コンピューター　6．教育　7．多文化・異文化・異年齢　8．幼小の教育的接続　9．幼保問題　10．保育の危機の分野に分けられる。預かり保育の検討やイギリスのコミュニティーナーサリーの様相・特質の分析などが子育て支援の研究として分類される。統合保育においては，障害のある子どもを取り巻く人間関係や，遊びや学習をどのように保障できるかを検討している研究がみられる。ジェンダーフリープログラムの効果や児童虐待の予防，また，コンピューターが保育室にもたらす問題も取り上げられている。さまざまな国の保育事情から我が国の保育を比較検討したり，アメリカの多文化・異文化教育が示唆するものについて論じている研究も少なくない。接続・連携，幼児教育と小学校教育の幼稚園と保育所の合同・統合，等について，分析や評価や提言が相次いでいる。これらは古くからの課題ではあるが，国・自治体の財政危機の深刻化の中で保育への予算減を進めようとする動きが顕著になる中で，新たな焦点となりつつある。だが同時に，すべての子どもの正当な利益のために保育の改善を図ってきた多くの先達者と現在苦闘を余儀なくされている保育関係者の願いがよく現れているところである。保育研究は，現場の問題と無縁ではなく，むしろ積極的に関わり，その改善に努めるという責務を研究者は自らに引き受けている。

Ⅴ．保育の歴史研究

1830年代から1980年代頃までの歴史的研究があり，フレーベル，モンテッソーリ，倉橋惣三らの研究や，保育思想，保育内容の確立過程などの研究がみられる。大正期が大きな焦点であることは多くの保育研究者の認識するところであるが，それが次第に昭和期に入り，今後，戦後期の分析へと進むであろう。歴史と比較文化研究が広がることにより，我が国の保育の相対化と改めてその特徴の抽出が進むに違いない。既に欧米圏や東アジア圏との比較はそちらの研究者との協同研究という形で進展しつつあり，数年の内に研究成果が出てきて，否応なく我が国の保育のあり方に影響するだろう。そこでの大きな特徴は単に輸入紹介型を越えて，我が国の保育の優れた点を取りだし，先方に参考にしてもらおうという姿勢である。尚，この項目に分類された歴史研究を年表にして，子ども社会研究紀要に発表したので，そちらも参考にされたい。

文献

佐々木宏子　2004　第7章　保育・幼児教育　児童心理学の進歩

無藤隆　塚崎京子　印刷中　乳幼児保育・幼児教育の研究の動向と実践の課題　子ども社会研究紀要

資料：保育・幼児教育の研究の動向－二つの学会誌10年間の動向の分析－

著　者	発表	タイトル	発表誌	概　要
1　実践現場の様子の分析				
1－1　園環境				
1－1－1　環境としての保育者				
立川多恵子 堀合　文子 上垣内伸子	1995	一人ひとりを育てる保育者の援助と保育内容	保 33-1, 41-46	「心情」の側面から保育内容に迫り、協同研究者の一人が年少組から担任した2名の幼児の卒園に至る3年間のそれぞれの自己活動によって獲得された発達過程を、その間の保育者の援助をからませながら述べている。子どもがいかに充実感を得ていくか、そこには同時に、幼児の活動の動機や取り組みへの態度や意欲が問題となり、心情・意欲・態度といったねらいが相互に関連しあっていることを示唆している。
中澤　潤 鍛冶　礼子 石井　恭子	1995	幼稚園教師の食事場面における援助の分析	保 33-1, 41-46	調査結果から、3歳児の担任は摂食や片付けに関わる傾向が強く、4歳児の担任は食事のマナーや会話を楽しむなど食事の社会的側面に関わる傾向のあることを明らかにし、子どもの技能や習得の程度など発達を踏まえた時期に応じた活動が、食事の援助内容として重要であることを示している。
池田　章子	1995	乳児保育における乳児の“会食”の構成	保 33-2, 61-69	乳児保育において食事がどう扱われ、いかにして会食が構成されているかを明らかにし、エスノグラフィーの方法論を適用することの可能性を探った結果、対象の2保育所の信念体系は2つの点において対照的であった。1つが心理的直接的対処 vs環境介在的間接的対処であり、2つめが同一化 vs差異化である。そしてその信念体系から十分予想されるような形式で“会食”が志向されていることがわかった。
金澤　妙子	1996	M子の午睡に関する一考察	保 34-1, 20-28	保育の場では、気になっていたこと困っていたことがいつの間にか気にならなくなることがよくあるが、その時保育者の中で何が起こっているのかを検討するために、女児の午睡の様子と保育者の関わりの変容を追いながら関係性や午睡観、健康観から考察を行っている。
佐木みどり 大場　幸夫	1996	幼稚園という場で“話さない”（話せない）Mちゃんにとっての楽しい幼稚園生活を考える	保 34-1, 43-52	集団の場で話さない（話せない）幼稚園の年長女児を対象に、女児の表現を、保育者や他児との関わりの中で記録し、その関わりの過程の中でどのような援助や環境が女児を癒していくのかを考察している。“話さないこと”も表現として認めようとしたことでつくられていった園の雰囲気が女児を癒していった経緯を事例によって検討している。
西山　修 片山　美香 謝文　慧	1997	被攻撃場面における保育者の幼児理解－5歳児クラスの事例的検討から－	乳 6, 75-82	被攻撃場面において幼児が抱く介入期待と保育者の期待認知との関係について5歳児2クラスを事例的に取り上げて検討を加えている。その結果、クラスによって幼児の介入期待と保育者の期待認知とのズレの様相はかなり異なり、被攻撃場面の文脈によって保育者の期待認知に一定のバイアスが存することが明らかになった。保育者にとって攻撃を被っている子どもの介入期待を捉えることが、きわめて困難なことも明らかにしている。
山本　和美	1998	保育の質的向上を目指すイギリスの新しい動きとその示唆するもの－保育の目標「望ましい結果」と保育の評価を中心に－	乳 7, 3-14	イギリス政府が保育を保証するために実施した2つの政策である、国による保育の共通の到達目標「望ましい結果」の設定と、保育施設を訪問して評価するOFSTEDの視察について取り上げて考察を行い、わが国にも示唆するものがあることを示している。
棚橋　治美	1998	身近な自然環境に関する幼児の自発的質問の研究－保育内容「環境」の指導・援助の方法の視点から－	乳 7, 15-24	身近な自然環境に関する幼児の自発的質問を分析し考察を行っている。幼児に対する教師の対応は、3歳児は、できるだけ丁寧に一人ひとりに情緒的に対応し、安定した環境の中で、様々な事物や事象に自ら探索し関わりをもてるように援助すること等、保育内容「環境」の指導・援助の手がかりを得ている。
加藤　純子 鈴木　方子	1998	「子どもがみんなと一緒に歌う」ことに対する保育者の意識についての考察	保 36-1, 59-66	保育現場で一般的な「みんなと一緒に歌う」という一斉活動についての保育者の意識調査を行っている。保育者は歌の一斉活動について多くの悩みをもっているが、その内容は、うまくできない、さわぐ、まとまらない等、理論だけで解決できる問題ではない。この活動のもつ多様な価値を活かすための保育者の配慮や方法が提示されている。
山本　和美	1999	保育の質的向上を目指す情報提供のあり方－日本とイギリスとの比較－	乳 8, 85-94	イギリスでは“保育の質”に関する項目が多く、その捉え方は具体的であり、このような保育の質の視点は、わが国の各保育所による情報提供に生かすことができ、利用者/保護者に役立つのみならず、保育者自身による保育の自己点検・評価にもつながり、適正な保育所運営のチェックや保育者および保育の質の向上にも役立つことを明らかにしている。
池田　章子	1999	乳児保育における乳児の“会食”の構成	乳 8, 1-10	食事環境の設定と相互交渉の2つの側面から2保育所の“会食”を探った結果、同じ1歳児の食事でありながら、2保育所の“会食”がまったく異なっていること、しかし、それぞれの“会食”の内部においては、環境の設定となされる相互作用とが整合的につながりあっていて、それぞれが独立したシステムであるとしている。
吉村　香 吉岡　晶子 柴崎　正行	2001	保育における子どもの主体性と保育者の環境構成－選択の構造をめぐって－	乳 10, 21-32	「保育者の援助としての環境構成とは、子どもの行為の選択をめぐる可能性の集合（選択前提）を、いつも、すべて構成することなのだろうか」という筆者の問いを追及した研究を行っている。保育者は環境構成によって、子どもの可能性選択の可能性をいつも、すべて構成しきることを目指すよりも、子どもの選択について推察的思考を繰り返し働かせることが大切であり、園生活では、子どもの自由意志による可能性選択と、保育者が環境に変換し提示した可能性選択のつき合わせを経て、子どもは自らの行為選択を行っていることがわかった。

梅田　優子	2003	子どもの遊び世界への保育者の援助についての一考察－「指向性」をもつ存在としての保育者と子どもからのかかわり－	保 41-1, 63-70	保育者が関わりを指向していた子どもたちの遊びへの援助と、それとは別の遊びを展開する子どもたちからの働きかけに対する援助をどのように調整し、展開しているのか、またその援助が子どもたちの遊びの世界にとってどのような意味をもつのか検討している。
高田　憲治	2003	自然と触れ合う環境づくりの実践と課題－子どもと自然と保育者の動的・相対的な実践研究－	保 41-2, 93-101	自然を復元する“ビオトープ”活動や植物環境づくりなどの自然と触れ合う環境づくりにおける様々な活動や具体的な実践のあり方を概観し、環境づくりの要因を整理した。保育者が様々な自然との触れ合い活動に、動的・対応的にかかわっていくことの大切さを示唆している。
高嶋　景子	2003	子どもの育ちを支える保育の「場」の在りように関する一考察－スタンスの構成としての「参加」過程の関係論的分析を通して－	保 41-1, 46-53	特定の遊具（三輪車）に焦点をあてて、それをめぐる園児、保育者、他の遊具などとの関連で「保育の場」の全体がどのように変容するかについて分析した結果、「保育の場」には子どもの主体的な育ちを支え得る、関係の変容の「可能性」が多様に埋め込まれていることを明らかにした。
立浪　澄子	2004	どう教える？「木は生きている」－子どもの内面形成に関心を寄せ続ける保育者の姿－	保 42-1, 51-58	4歳児のごっご遊びに注目し、保育者の解釈と指導方法の分析を通して保育者のあり方を検討した。保育者は「見通し」を常に持ち、幼児が何をどこまで理解しているかを瞬時に見て取り、その理解に基づいて幼児に的確な働きかけをすることが求められるとしている。親に勝るとも劣らない人的環境として子どもの傍らに寄り添う保育者の専門家としての今日的姿勢を追及している。
伊藤　恵子	2004	文字への関心を友達への関心へと変えていった保育者の存在－自閉傾向を伴う子どもに対する人的環境としての保育者－	保 42-1, 29-41	自閉症傾向の3歳児と他の園児たちとの人間関係の継時的変化と保育者のあり方を分析している。対象児の変容経過を観察記録や対象児の文字や絵で跡づけ、また、保育者のあり方としては、保育者との話し合いを踏まえて「子ども同士の関係性」へと広げている。
1－1－2　物的環境				
阿部　恩 今井　晥弍 日高沙千江	1996	震災と保育	保 34-1, 70-81	「阪神淡路大震災後の保育についての調査－子どもの心のケアについて－」を被災地周辺の23園の保育施設と園児の保護者及び保育者を対象に実施した。本研究では、保護者編として、被災時における子どもの受けた衝撃、被災状況の実態を把握すること、及び親をはじめとする家族が子どもの心のケアに果たした役割について認識することを目的としている。また、保育者編としては、保育再開後保育現場において、心のケアが必要であると思われる子どもたちに対して、直接的及び親を通して間接的に、如何なる関わりや工夫をなし、どのように緊急事態を乗り切ったかについて、聞き取り調査を通して把握することを目的として、それぞれの調査結果を報告している。
浦添　綾子 仙田　満 矢田　努	1997	幼児の活動空間における安全性について	保 35-2, 12-19	幼児の生活空間を建築空間の視点からとらえて、事例の分析をとおして安全について、特に園舎内の事故についてその要因と対策をまとめている。
宮原　和子 小方　信二 鹹味千寿子 宮原　英種	1997	保育環境の安全性に関する研究－安全性、健康・衛生チェック・リストの作成と園内事故の調査－	保 35-2, 20-27	著者らが作成した「安全性、健康・衛生チェック・リスト」を実施した保育所、幼稚園115園の調査結果から保育者が保育環境についてどのようにチェックしているのかを明らかにしている。さらに保育園43園に対して過去1年間のけがや事故に関する調査を実施し、保育園における事故のおおよその傾向を捉えている。
高田　敏江	1997	災害報告書の分析からみた安全教育への一考察	保 35-2, 28-37	著者の幼稚園の日本学校健康センターに報告した災害報告書の6年分をまとめて分析し、今後の事故対策について報告している。幼児の園生活における安全について、教育課程、教師の援助、指導計画、施設・設備と安全および保育活動の静と動のバランスの観点から考察している。
槇　英子	1998	幼児の表現活動を支援する保育環境の構成－物的環境構成の実践と理論－	保 36-2, 16-24	望ましい物的環境構成は、選択性と開放性を尊重し、子どもの成長の契機になるような多方向への組織化が可能な状況を応答的に整えるものであることとし、それを組織化と流動化を保障する物的環境構成理論として、その概略を図示している。
高橋　敏之 木内菜保子	1999	自分と身近な公共の乗り物とのかかわりを主題にした絵本と小学校生活科学習との関連性－先行体験としての幼稚園教育における絵本環境－	乳 8, 63-74	小学校生活科で教材となっている電車に関する絵本を28冊みつけて、生活科学習以前にそれらの絵本を読むことは、普段の生活で電車に乗らない子どもにとって基礎的知識を得ることになるとしている。バスを中心に扱った絵本は非常に少なく、5冊しかみつけることができなかったと報告している。
福田　秀子 無藤　隆 向山　陽子	2000	園舎の改善を通しての保育実践の変容Ⅰ－研究者と保育者によるアクションリサーチの試み－	保 38-2, 87-95	園舎内の様々な場所とその場における子どもたちの活動の様子を観察することによって、幼稚園環境と子どもたちの活動の関わり方を検討した。その結果をふまえて園舎の改善が行われ、変化に富んだ動きやすいものにした結果、保育者の労力は幾分軽減されたが、子どもの動きがより活発になったことを報告している。物理的な環境の設定を変えたことにより子どものあそびが変容していく様子が多く観察されたが、その背景には保育者による生きた場所の使い方や方向づけが働いていることを示している。
丸山　良平 松澤久美子 今村しげ子	2002	幼稚園において野生のメダカを飼育する意義について	保 40-2, 64-71	対象園の近くの用水路に生息しているメダカを幼児に捕獲させて、飼育させたことにより、子どもたちが、野生メダカの飼育経験を通して人の便利な生活が他の生物の生存に与える影響を考えたり、地域環境に目を向けたりするようになったことを報告している。地域で捕獲した野生メダカが教材としての大きな価値を持つようになったことを示している。
塩見　優子 立石あつ子	2002	幼稚園・保育園における遊び、遊具の配置、動線に関する研究－砂場、ブランコを中心として－	保 40-2, 81-89	すでに園庭に固定されている遊具を現代の変化にあわせて交換することは難しいが、環境の変化を考慮した望ましい環境づくりは必要であるとし、幼稚園、保育園における遊びの実態、遊具の配置、動線の関係を考察して、配慮すべき12の事項を明らかにしている。

福井　晴子	2003	幼児の折り紙遊びを支援する保育図書の望ましい在り方	乳 12, 89-98	子どもの折り紙に関する保育図書を検証し考察を加え、保育者や保護者及び地域での子どもの遊びや行事の指導者等の人々に、折り紙についての再考を促し、幼児の造詣教育の改善を呼びかけている。
渡邊　保博	2003	延長保育と保育の質－1970年前後の延長保育をめぐる議論と実践の検討を通して－	保 41-2, 8-15	保育の質の探求過程を実践史の観点から整理し、今日の保育の質研究にとってそのもつ意味を検討した。特に、近年の一連の「規制緩和」や「第三者評価事業」への問題提起として、保育の質が最低基準のあり方と密接不可分の関係にあったことを示している。
1－2　保育の中の「やり取りの分析」				
1－2－1　人間関係				
関　史子 田村　玲子 梶浦由比子 沢村　朱美 澤田　陽子	1995	幼児の人間関係の発達を促す「教育（保育）内容」としての保育者のかかわりの研究	保 33-1, 27-34	参与観察法により、3歳～5歳の年齢別かつ年間の区切りを併行させた幼児の人間関係の発達を調べたもの。幼稚園における幼児の人間関係の類型を、「存在」、「発見」、「接近」、「参入」、「仲間あそび」の5相から、44タイプに分類し、その枠組みを用いて年齢別にその布置状況の変化をとらえ、さらに1つの試みとして4歳児の人間関係の指導カリキュラムを作成している。
関口　準 岩崎　婉子	1995	幼児の自発的な遊びにおける了解としての相互交渉の発達的な考察	保 33-1, 35-40	人間関係の発達を促すために必要な体験を幼児自らが遊びを通して得られるように援助することを求めて、4歳児から5歳児の2年間にわたって継続観察した30名を対象に、エピソード分析を行っている。そこから人間関係における相互了解の発達過程を、3つの道筋によって示し、その過程の中で同時に、幼児は外面的な行動による相手の認知から内面的な気持ちの読み取りを行う方向に進むという質的変化や、相互了解には欲求の受容や維持の側面と無視や拒否をしあう側面があるとしている。
布施佐代子	1995	3歳未満児における保育者と子どもの共感的な遊びについての一考察	保 33-1, 52-58	子どもの相互交渉を促す保育者と0歳児・1歳児の12名の乳児を対象に、遊びの実践例を観察・記録、整理している。一人一人の子どもに応じた保育者の共感的な対応から、0歳児後半頃までには、保育者の働きかけを期待する心が育ち、1歳代では自ら保育者や他者と共感し合う楽しさを作り出そうとするようになるという発達的変化を確認している。
岡林真実子	1995	笑いと子どもの人間関係について	保 33-2, 53-60	言葉遊び的対話は、言葉の表現そのものを楽しむものであり、子どもたちはその対話の中で同質的なおもしろさを共有している。この種の笑いは、5歳という時期の幼児にとって普遍的なものであると考えられるが、それに対して〈ボケーツッコミ的対話〉は、双方にパーソナリティーを反映した役割的なものが見られ、異質的な対等性に基づく笑いであるとしている。
倉持　清美 柴坂　寿子	1996	幼稚園生活を通した子どもの変容－ある問題を抱えた子どもの事例から－	保 34-2, 16-23	途中で転入し、卒園までの間に遊び方や人との関わり方が大きく変容したという印象を受けた男児を取り上げて、その変容過程についての考察を行っている。幼稚園の場の特徴である、周りに友だちがいるという開かれた状況と、友だちとの相互交渉に十分時間をとることができる自由保育という保育形態が対象児に自信を持たせ気持ちを安定させることを見出している。
姜　信　善	1997	子どもの仲間関係におけるコミュニケーションスキルの役割（1）－社会的地位と性別を中心に－	乳 6, 83-94	子どもの社会的地位によるコミュニケーションスキルの差を検討した結果、各社会的地位群によるコミュニケーションスキル、すなわち、働きかけスキル、反応スキル、感情的、攻撃的表現、及び遊びへの参加行動が社会的地位によって異なることを示した。このことから、遊びへの参加行動と行動的コミュニケーションを含んだ子どもの非言語的行動が仲間関係に重要な役割を果たしていると考察している。
松井　淳子	1999	集団活動場面における幼児の他者理解－友だちについての語りの観察から－	乳 8, 53-62	保育者やクラスメートとのやり取りを通じて幼児が友だちについてどのように語るのかを観察し、幼児の身近な友だちについての捉え方や、保育者との相互作用の中で他者についての捉え方の構成を検討している。その結果、子どもたちが友だちについて語る際には、外見ではなく人格特性という側面から語る傾向があり、「いつも」という表現が多くのケースで用いられることから、その人らしさを表す習慣的・典型的な行動のパタンを意味していることが明らかになった。また、保育者は子どもの回答を受け止めつつも、子どもが語る内容に関してさらに問いかけたり意味づけたりといった働きかけを行っていることを明らかにした。
佐野　美奈	2000	子どものドラマティック・プレイにおける教師介入（DPI）の意義－教師－子ども関係について－	保 38-2, 33-40	DPIの有無によるドラマチック・プレイの質的差異を考察した結果、教師は子どものせりふや動きを書きとめ、場面に合った音楽や歌を子どもとともに考えるが、この教師の介入を少しずつ少なくしていくことによって、子どもの相互作用、協調は、劇化が集団で展開していく中で、培われていく。また、DPIは、教科内容の習得とは質的に異なり、教師の介入の仕方いかんによって、子どもの関係もパラレルに終わるか、相互交渉的になるか、単なる子どもの成熟度だけで解決できない問題となることを指摘している。
田宮　緑	2000	事例から見る幼児期の仲間関係と自己形成	保 38-1, 12-19	幼児が仲間と出会いさまざまな関わりの経験をとおして成長していく過程を明らかにしている。WPPSI知能検査・面接ソシオメトリックテスト・性格診断検査・エピソード分析・ネットワーク分析などの方法を用いることで、幼児の仲間関係の構成とその変化、自己形成過程をより明確にとらえようとした。
野尻　裕子	2000	幼児にとって相手と「繋がる」ということの意味－うまく「繋がる」ことのできない3歳児の一事例から－	保 38-1, 20-27	鯨岡のコミュニケーション理論を背景に、事例研究を行った結果、子ども同士の繋がりの成立には、相手の思いの正しい理解と、互いの充実感の了解が必要であることを明らかにしている。また、子ども同士の関わりを深めるためには、養育者や保育者の適切な対応や援助が重要であることを指摘している。
吉村　香 田中三保子 柴崎　正行	2000	保育における人間関係創出過程－「間」と「間合い」に着目して－	保 38-1, 36-44	2年間の保育観察と保育後の話し合いをもとに、再構成した保育についての分析。保育の場における人間関係創出過程では、次の3点、①他者との関わりを通して共に何かをしようとする心情の形成、②相手の状況に触れる体験を通して相手の状況に気づくこと、③保育者の細やかな配慮が目に見えないところでも常になされていること、の重要性が示唆された。

成田　朋子	2000	事例研究：幼児の人とかかわる力を育む	保 38-1, 61-68	子どもと関わる中で、また研修を重ねる中で自分を振り返り、子どもの行動に対する見方を変え、子どもへの接し方を変化させることによって、子どもが人と関わる力を発達させた実践をあげて考察を行っている。保育士たちがこのような地道な試みを重ねることによって、一人一人の子どもに、人とかかわる力を育むことができることを示唆している。
大森　洋子 友定　啓子	2000	4歳男児の人間関係の変化と保育者のかかわり	保 38-1, 69-76	保育者の保育記録をもとに、子どもたちが保育者との関わりを通して変化していく姿を追求している。子どもの人間関係は予想以上に複雑で、思うようには変化しない。矛盾を抱えた人間関係であっても、子どもたちにとっては意味をもつものであり、その中で成長していくことを保育者は支えなくてはならず、子どもたちの人間関係の全体を捉えた上での、保育者の粘り強い働きかけが重要であることを示唆している。
齋藤　正典	2000	教師と幼児の関係性の中での教師の援助の変容	保 38-1, 77-84	保育全体の文脈性を考慮しながら長期間調査し、特に保育者と幼児の関係性に注目してその記録を分析することによって、保育者の援助のあり方を追及している。その結果、保育者の援助には、保育者主導の特性と子ども中心の特性の相反する2つの特性が存在し、保育者の援助は、この2つの特性に対する重心の置き方や重心の移動によって揺れ動き、幼児との関係性の中で両特性の融和・統合がなされることを明らかにしている。
三宅　茂夫 田中　享胤	2001	保育におけるコミュニケーション生成の改善－誘因としての保育者の“ことばかけ”	保 39-2, 49-58	幼稚園における幼児のコミュニケーション生成生活の改善を目的に、保育者の誘因的な“ことばかけ”をとりあげている。その結果、できるだけ幅広い解釈ができるように配慮することや、“ことばかけ”の内容が幼児の実態や経験、生活などに接近したものであること、また、その幼児に適した“ことばかけ”をゆったりと余裕をもって行うこと、などをよい保育者の“ことばかけ”の条件として見出している。
松井　愛奈	2001	「仲間との相互作用のきっかけにおける転換と一貫性」－子ども2人の3年間の縦断事例をもとに－	保 39-2, 59-65	幼児が仲間との相互作用のきっかけをどのようにつかんでいるのかを、事例をもとに具体的に検討した。仲間との相互作用のきっかけを生む働きかけを捉える上で、年齢的変化と同時に、使用方略の転換や一貫性といった個人差を今慮する必要性と、方略にはさまざまな文脈に適用可能な柔軟性があり、幼児は次第に複雑かつ双方向的な相互作用が可能になることを示唆している。
野田（松井） 淳子 深田　昭三	2002	保育のフィールドにおける発達支援－対応の難しい子どもと保育者の変容をうながしたもの－	乳 11, 33-42	幼稚園において衝動性の高い3歳児と保育者の変容に着眼し、保育者の認識の変容を規定していたものを、主として保育者の認識と男児の姿の間でどのような“ずれ”が生じていたのかという観点から考察している。
畠山　美穂 畠山　　寛 山崎　　晃	2003	仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか？－日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して－	保 41-1, 20-28	「仲間とうまく関われない」一人の子どが保育生活を通してしだいに「他者と関わる」社会的スキルを獲得していく過程を分析した。この獲得過程を特定のスキルの「訓練」結果としてではなく、保育における保育者や他児との自然な関わり、またその子らしい独自の「他児へのアプローチ」の展開などと関連づけて論じている。
上田　七生 山崎　　晃	2003	乳幼児の愛着形成に関する短期縦断的研究－保育者との関係が第一愛着対象者との関係に及ぼす影響－	保 41-2, 66-74	第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児が保育者との間に愛着関係を形成する過程、およびその愛着関係の変容過程、第一愛着対象者との関係の変容過程について検討した。その結果、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児が、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者である保育者との間に愛着関係を形成させ、徐々にその愛着関係が安定していいくことが明らかになった。それにともない、友達に対する優しさが芽生えるなど、友達関係にも変化がみられた。
堀越　紀香	2003	ふざけ行動にみるちょっと気になる幼児の園生活への対処	保 41-1, 71-79	ちょっと気になる男児が園生活の中でどのようにふざけを利用して状況に対処しているのか、また、男児にとってふざけがどのような働きをしているのかを検討した結果、ふざけのやりとりはコミュニケーション手段であり、ふざけに出会ったときには、子どもの心理の理解とふざけざるをえない状況把握に努めることが必要であることを示唆している。
湯澤　美紀	2003	幼児期における親友関係の質的変容－年長児クラスにおける2名の男児に着目して－	乳 12, 63-74	幼児期における子どもの親友関係の質的変容を探るため、親友関係にある年長児クラスにおける2名の男児に注目して、一年間にわたる観察記録から抽出した変容過程を、幼児期における友達の概念、ならびに社会性に関する発達心理学的観点から整理して、子どもの人と関わる力を育む保育の取り組みを考察している。
久富　陽子	2004	外国人の子どもと保育者とのコミュニケーションに関する一考察	保 42-1, 19-28	日本語を理解できない外国人の子ども（3歳）と保育者との、言葉の通じ合わないいもの同士の間でどのようなコミュニケーションが成立し、変容していくかを探求した。保育者が言葉以外の小さなサインやメッセージに応えていくなどのいくつかの保育者のあり方を検討している。
河原　紀子	2004	食事場面における1～2歳児の拒否行動と保育者の対応：相互交渉パターンの分析から	保 42-2, 8-16	子どもの拒否行動を含む保育者との相互交渉のパターンと、子どもの食行動の発達に伴なう、子どもの拒否行動への保育者による対応の変化を観察した結果、1～2歳児の拒否行動を契機に、保育者は子どもの主体性、自律性を尊重しつつ、自身の要求にも応じることが可能であるような対応を巧みに行っていることを明らかにしている。
1－2－2　身体の働き				
無藤　　隆	1996	身体知の獲得としての保育	保 34-2, 8-15	保育を、子どもに対して対象に見合った動き（対象と子ども主体との動的な身体関係）の多様性を保証するものとして理論化した。遊びは必ずしも一貫した明瞭な枠組みや筋書きを持つものではなく、その場やその周辺にある物・人と対応した新たな動きを持ち込むことと、その動きが喚起する過去の思い出での動きの再現などから、絶えず揺れつつ進行することなどを示唆している。

古市　久子	1996	幼児の身体表現における「豊かさ」の概念について	保 34-2, 24-32	現場の保育者が「豊か」と感じた身体表現の場面描写を分析し、身体表現の「豊かさ」の概念を検討した結果、「豊かさ」の概念は7つの要因からみることができ、要因の中には、それぞれいくつかのカテゴリが含まれていて、対象にする子どもの年齢によってその構造が違うことが明らかになった。
スーザンD.ハロウエイ 日浦直美訳	1997	日本の保育施設における親密関係の形	乳 6, 95-102	著者が関西地方で参観した保育施設を①社会志向型②子ども志向型③役割志向型に分類し、それぞれのタイプについて述べている。それぞれの特徴として、①子どもを集団生活に順応させるよう努力している、②保育者と子どもがより多くの1対1の関わりの機会を持っている③ある特定の状況の中で子どもが従事していると考えられるどのような役割の中にも、子ども達が自分のアイデンティティを入没させることができるようにしようと努めている、と述べている。
榎沢　良彦	1997	園生活における身体の在り方－主体身体の視座からの子どもと保育者の行動の考察－	保 35-2, 38-45	「集団として行動するということは、“子どもたちの個々の身体が協同してわれわれの身体を形成すること”なのであり、そうすることで、個々の子どもの身体が一人一人の行動を支えるのであり、保育者は、自分の身体が自ら動き出す身体でなければならないが、同時に、自分の身体をもって、子どもの身体がそのような身体であるように支えなければならない」と述べている。
西　洋子 本山　益子	1998	幼児期の身体表現の特性Ⅰ－動きの特性と働きかけによる変化－	保 36-2, 25-37	子どもが定型的な身体表現を行う割合は、かなり高いことを明らかにし、創造的な身体表現において、定型化した表現で用いられる動き以外にも、多くのバリエーションをもつ動きが行われ、題材のとらえ方は、子ども自身の生活に根ざした方向へと変化することを確認している。
榎沢　良彦	1998	子どもの行動空間と身体性－生きられる空間の視座からの子どもの行動の解釈－	保 36-2, 45-52	行動空間としての園空間の特質を、子どもの身体性（身体のあり方）との関連で考察を行っている。保育者の身体の動きにより、子どもの行動空間が拡張したり、行動空間の質が潜在性から顕在性へと変容し得て、両者が「我々関係」にある場合には、それが容易に生じることを指摘している。
砂上　史子 無藤　隆	1999	子どもの仲間関係と身体性－仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること－	乳 8, 75-84	「他者と同じ動きをすること」という現象の分析と論証を目的とし、実際に生じている現象を詳しく記述して考察している。その結果、①保育において、子ども間の仲間意識は、当該の仲間関係に属する他者と同じ動きをすることと一体となっている。②仲間意識の共有として他者と同じ動きをすることは、関係の内部と外部に対してその関係を証明する機能を持つ。③仲間意識の共有として他者と同じ動きをする場合、それに重なる共同性は、当事者間の志向性が双方向的か一方的かによって区別される。ということが明らかになり、以上から、保育における子ども同士の関わりにおいて、他者と同じ動きをすることが、その仲間としての関わりにおいて重要な役割を果たしているということを示唆している。
森　司朗	1999	幼児の「からだ」の共振に関して－対人関係的自己の観点から－	保 37-2, 24-30	幼児の遊びの中で生じる「からだ」での共振性に関した事例を通して対人関係的自己の存在を明らかにしている。子どもたちのからだの動きは、従来の単なる身体的な活動としてだけではなく、社会的な相互作用を通して得られる環境（他者）との行為可能性の情報を知覚するための環境と接触している存在であり、自己をあらわしていると考察している。このことにより、からだの動きには人間の認識の発達において重要な意味があることを示唆している。
砂上　史子	2000	ごっこ遊びにおける身体とイメージ－イメージの共有として他者と同じ動きをすること－	保 38-2, 41-48	子どもが他者と同じ動きをするという現象における基本的な身体のあり方を「共鳴・共振する身体」「まとまりとしての身体」として捉え，このような見方を一つの切り口として用いて具体的な事例の考察を行った。その結果、ごっこ遊びにおけるイメージは、身体の動きと一体となっており、他者と同じ動きをすることは同じイメージを共有することに重なること、また、ごっこ遊びにおいて他者と同じ動きをすることは、個々のイメージだけでなく、ごっこ遊びの設定自体の共有にも重なることを見出した。幼児期後期のごっこ遊びにおいても、言葉が動作に置き換わるわけではなく、動作という身体の動きは言葉とともにイメージの表現や共有において重要な役割を維持し続けることを示唆している。
西　洋子	2001	保育者と身体性	保 39-1, 12-19	子どもと豊かにかかわる“柔らかなからだ”を、保育者の専門性と位置づけ、その身体性を築く方法を模索しながら、6回の身体表現のワークショップを展開した。保育者が記述したワークショップの感想や、保育エピソードを質的に検討し、保育者が体験的な理解を基盤に、子どもが共振しながら遊ぶ様子や、遊びが揺れながら展開する様子を捉えている。保育者は、自分自身の身体性から子どもを理解する新しい視点を築き、からだを通して子どもとのかかわりをつくりだしていることを確認している。
砂上　史子 無藤　隆	2002	幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き	保40-1, 64-74	場を共有するということにおける子どもの身体知が発揮されるのは、場の部外者である子どもが場の参加者となるその過程であることに注目し、「遊びのなかで他者が作った場に入る際に、場の使い方を教える/教えられる」という現象に焦点を当て、子どもが他者と一緒に遊ぶことおよび場を共有するということにおける具体的な事例の分析と論証を行っている。
新山　順子 高橋　敏之	2003	保育者としてふさわしい身体を養成する身体表現の可能性とその実践	保 41-2, 16-23	すべての保育行為の基盤である身体への直接的なアプローチを視点に、保育者養成校における身体表現の授業内容を再検討している。具体的には、身体的コミュニケーション能力の高い養成や、その基礎を培うような学習効果を得るための授業実践を報告し、身体的自己発見と保育実践との関連性を考察している。
塚崎　京子 無藤　隆	2004	保育現場における3歳児の身体接触の変容	乳13, 13-26	3歳児の保育場面で見られる身体接触の実態を明らかにし、入園から進級前までの約1年間の子ども同士、また、保育者と子どもの身体接触の変容を、検討している。身体の動きと意味、発生場面、交わす相手による身体接触の特徴、また1年の前期と後期による身体接触の変容などに視点を置いて、細かく分析している。

塚崎　京子 無藤　　隆	2004	保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連－3歳児クラスの観察から－	保 42-1, 42-50	3歳児保育における保育者のスキンシップの機能と有効性について観察記録から分析を行っている。その結果、3歳未満児のみならず、3歳児保育においてもスキンシップは頻繁にやり取りされており、子どもと保育者、子ども同士の関係を繋ぐ重要な機能を果たしていることを明らかにしている。
2　保育者の力量と成長				
秋田喜代美 無藤　　隆 安見　克夫 藤岡真貴子	1995	コンサルテーションによる保育環境の構成	保 33-2, 70-77	保育研究会で話し合われた内容が保育者の創意工夫によって保育のあり方や環境にもたらす変化に注目し、保育研究者を交えての保育研究会のあり方・可能性・問題等について、「コンサルテーション」という概念を中心に検討を行っている。その結果、以下の4点を一般的示唆として取り上げている。①システム的な視点は研究者が示すことのできる新たな視点である。②助言は、新たに別の問題を生む可能性があるという葛藤、ディレンマを含んでいる。③外部助言者は全保育を時間の流れにそってみているわけではないので、一般論としては妥当でも適切な助言になっていない場合がある。④園長や熟練保育者が橋渡しとまとめの役割を担う者として改善への重要な鍵を握っている。
原田　碩三 原田　昭子 長谷川勝一	1995	エゴグラムによる保育者の特性	乳 4, 67-78	エゴグラムを用いて保育者の特性を探った結果、母親のエゴグラムの特性と子どもの運動能力や行動特性等の間には無視できない関係がみられた。エゴグラムは、保育者が自分の適性を見分け、自己改革をするための資料になり得ること、しかし、これも子どもの特性によることなどを示唆している。
嶋崎　博嗣 森　　昭三	1995	保育者の精神健康に影響を及ぼす心理社会的要因に関する実証的研究	保 33-2, 35-44	保育者の精神健康を阻害すると考えられる心理社会的要因を数量的に検討した結果、保育者の精神健康状態は仕事の士気の低下および子どもに対する否定的イメージと有意な相互の関連性があり、低下の背景は、職員および保護者との不快な人間関係やストレス性の高い職場環境に強い影響力が認められた。また、現実本位の気持ちを持つことが精神健康を保つ上で重要な要因であることが示唆された。
有賀　和子	1995	輝きのある生活を子どもと共に創る－子どもと教師の“ズレ”を見つめ直して－	保 33-2, 78-87	教師は、保育をしているその時その場面やエピソード記録を書いている時、また、保育を振り返ってみた時や研究会など、いろいろな人と話しをしている中で子どもとの間のズレを発見していること、また、輝くとは、教師も子どもも保護者もそれぞれが自分らしさを出して、自然に生活することであり、ごく普通の生活をしていくことであると述べている。
高濱　裕子	1995	保育者と自己抑制タイプ児との意図の相互調整	保 33-2, 26-34	自己抑制タイプの対象児と保育者との相互交渉を検討し、意図の相互調整のプロセスを検討した。幼児の遊びの進行と保育者の介入時の認識との間に時間的ずれがあるのは、保育者がその前の介入時の幼児の状況をベースに遊びの状態を解釈するからであり、意図のずれ自体が問題なのではなく、保育者がずれをずれと感じ取り、それを調整してすり合わせることこそが重要で、それが幼児の個人差によりフィットさせた保育者の関与を可能にしていくことを示唆している。
田中三保子 桝田　正子 吉岡　晶子 伊集院理子 上坂元絵理 高橋　陽子 尾形　節子 田中都慈子 田代　和美	1996	保育カンファレンスの検討 第1部 　現場の立場から考える 第2部 　研究者の立場から考える	保 34-1, 29-42	それぞれの日々の保育に関する問題意識を提示して話し合ってきた現場の立場から、また、カンファレンスを共に行ってきた研究者の立場から、保育カンファレンスの検討を行っている。保育カンファレンスが本当の意味で保育者の成長に寄与し、より良い保育をめざす場となるためには、全員が実質的に対等な立場で参加できる場であること、それぞれが自分の考えを出しながらも、相手の立場に立って考える努力をし、その中で、自分自身を客観的に捉えられる力を養っていかれる場であることが必要であるとしている。
大豆生田啓友 高杉　　展 若月　芳浩 渡辺　英則	1996	「保育の物語を探る」事例研究の試み－リアリティに迫る研究の在り方を求めて－	保 34-1, 12-19	保育を新たに捉える視点として「保育の物語を探る」という試みを事例研究により行っている。研究会の在り方やＶＴＲによる映像の果たす役割について、また、リアリティに迫る実践研究のあり方についてを論じている。
志賀　智江	1996	幼児理解を促進するための教師教育プログラムの開発と試行 （2）－インサービス段階における教師の幼児理解の発達を基盤として－	乳 5, 43-54	インサービス段階に焦点を当てて、幼稚園教師を対象としてインタビューを行い、教師経験の段階による幼児理解の深まりを知るために、教師経験の各段階における教師の幼児理解の実態を明らかにした。さらに幼児理解を促進するための各段階ごとの課題とそのための方策を体系化した。幼児理解を中心としてみてみると、教師の成長発達のためには、教師の力量形成に必要な知識の習得やさまざまな方策など、それぞれの段階に合わせた体系的な研修のあり方が必要とされることが明らかとなった。
浜口　順子	1996	「育ち」と「発達」	保 34-2, 33-40	「育ち」という用語の使用状況を概観し、「発達」という語との比較を通して、その保育学的な意義について論じてている。「育ち」という用語が、近年の保育関係の文献において、1990年前後から増加してきていること、また、その背景として、子どもを、育てる対象から、自ら育つ主体としてとらえるという、子ども観の変化がみとめられることを指摘している。さらに、「発達」ということばでカバーされにくかった保育者的なまなざしが「育ち」ということばに託されて使用されていることから、「発達」という概念が保育学的に再解釈されていく過程に、「育ち」という古くて新しい用語が採用されているのが現状ではないかと述べている。
岩立志津夫 諏訪　きぬ 土方　弘子 金田　利子 木下　孝司 齋藤　政子	1997	保育者の評価に基づく保育の質尺度	保 35-2, 52-59	筆者たちが作成した項目に対する「保育の質を評価する場合の重要度」での現場の保育者の判断を元にして、3歳未満児を対象にした保育の質を測定するための尺度案「3歳未満児用保育の尺度案 1997」を提示した。「3歳未満児用保育の尺度案 1997」は次の2つのステップで使用される。①30の質問項目を評定尺度によって評定する。②その結果を16の因子ごと、領域ごと、全体で集計する。評定尺度としては5段評定が考えられる。保育の質を信頼性と妥当性をもって評価できるようになることで、保育の質が実際に向上したり、高い保育の質が維持されることを期待している。

吉村　香 吉岡　晶子 岩上　節子 田代　和美	1997	保育者の成長における実践と省察	保 35-2, 68-75	保育者が省察をベースに問題解決をはかる際、省察が実践の経験的記述化および抽象的一般化の機能を有することを実証的に解明している。また、問題解決過程では問題意識の生起・追求のプロセスにおいて個別な価値基準が反映すること、解決の仕方には、問題の焦点となっている子どもの行動の変化を見届けることが、解決の契機となることが2名の保育者に共通して見出された。
高濱　裕子	1997	保育者の保育経験のいかし方－指導の難しい幼児への対応－	保 35-2, 84-93	保育者の保育経験に注目して調査を行っている。保育者は経験によって指導の難しさを感じる幼児のタイプに違いがあり、それは、経験による関心の違いから生み出されていることや、経験者は複数の視点から、初心者は単一の視点から幼児をとらえていて、経験によって、幼児を理解した方法に違いがあったこと、また、保育者は、経験とともに幼児の個人差への関心を広げていくが、その関心の変化が、幼児をとらえる視点や保育行動に違いを生み出すことが示唆された。
堀　淳世	1997	幼稚園教諭が語る指導方法－経験年数による違い－	保 35-2, 60-67	具体的な多くの事例への対応を質問する半構造化面接によって幼稚園教師の指導方法の形成過程について分析を行い、典型的な「指導方法」や、経験年数によって異なる「指導方法」を見出している。経験年数の長い教師ほど10分、1時間、あるいは2、3日間へと時間的展望が長くなるように変化していることを明らかにし、その背景には、日々の園生活がダイナミックに動く原則に気づいているからではないかと考察している。
関口はつ江 柴原　宣幸	1997	教育実習評価に影響を及ぼす実習園側の要因について	保 35-2, 110-117	担当教諭の年齢（とりわけ20歳代前半と30歳代後半）によって実習評価結果が異なり、両群の間の評価基準に、何らかの相違があるらしいこと、また、卒園生が実習に来た場合に評価が高くなる傾向があり、とりわけ学生との間に師弟関係がある場合にはより顕著となることが明らかになった。
岩田　恵子	1997	子どもたちのやりとりから「その子らしさ」をみてとるのはなぜか	保 35-2, 46-51	「子どもの捉え方」を問題にとりあげて考察した結果、ある子どもの本当の特性を理解するには、その子が持っているものが、周囲との関係性の中でどのように発揮されているかを意識的に考えていく必要があるとし、なぜなら、子どもの行動は、その子一人が行っているときに解釈されるよりも、誰か他の仲間といるときに解釈されることの方がはるかに多いからであることを指摘している。
師岡　章	1997	保育者の「構想力」に関する研究	保 35-2,	週日案が作成かつ修正される過程を通して読み取れる、保育者に固有な思考様式に注目し、思考の総体を「構想力」と呼び、この構造の解明を行った結果、保育者の「構想力」は、保育活動を連動させながら、実践を創造的に展開し得る実践的力量の中心的なものであり、この力量なくして、保育活動の向上はありえないと指摘している。
藤﨑眞知代	1997	子どものコンピテンスを育む保育の分析－母親を介した保育者の間接的影響－	保 35-2, 94-101	コンピテンスの自己評価が正確でない子どもの母親は、保育者から特に子どもに対する態度・姿勢について影響を受け、こどものコンピテンスの自己評価の正確さが増すと、母親は子どもの精神的たくましさが増したと認識していることがわかった。さらに、コンピテンスの正確な自己評価を育む方向への保育者の直接的影響、及び母親を介した間接的影響との関連を明らかにしている。保育者は親を「親にする」方向へ影響力をもつ存在であることを裏付けている。
岩立志津夫 諏訪　きぬ 土方　弘子 金田　利子 木下　孝司 斎藤　政子	1998	「3歳未満児用保育の質尺度案1997」による公私立差・地域差・保母の年齢差の検討	保 36-2, 87-93	保育者の評価に基づいて作成した「3歳未満児用保育の尺度案1997」を使って、特に、保母の年齢差の違いや公立保育園と私立保育園の違い、また、地域の差が保育にもたらす影響を検討している。保育者同士の関係は、私立は公立よりも良好であり、20歳から25歳の保育者は、26歳から30歳と41歳から61歳の保育者よりも遊戯室の意味と使用について関心度が高いことなどを明らかにしている。
吉村　香 吉岡　晶子 尾形　節子 上坂元絵里 田代　和美	1998	保育者の実態把握における実践構想プロセスの質的検討	乳 7, 55-66	保育者の実践把握には、子どもの実態と保育者自身の実態把握が含まれること、保育者は実践上の問題の原因を、子ども・自分の双方に見出すこと、また、原因は、関連ある事柄を想起して照合し、時には複数仮定すること、さらに、インタヴュアーの関与が保育者の実践構想プロセスに影響を与えることや、実践行為の計画と実践の方向の指向は、異なるプロセスを形成していることなどを明らかにした。
戸田　雅美	1999	保育行為の判断の根拠としての「価値」の検討－園内研究会の議論の事例を手がかりに－	保 37-2, 55-62	保育行為の判断の根拠としての「価値」を検討することとはどのようなことかを園内研究の事例を通して考察し、保育者の行っている「価値判断」の実際と、その検討の方法について具体的に明らかにしている。さらに保育行為の判断の根拠としての「価値」の検討が果たす機能について考察している。
齋藤　友介	2000	保育士の働きがいに及ぼす保育者効力の影響	保 38-2, 26-32	保育士の働きがいが保育経験期間に一義的に影響を受けるものではなく、むしろ保育者効力の高さの影響を強く受けることや、保育者効力が保育経験期間の影響を受けることなどを明らかにした。
冨田　久枝	2000	幼稚園教員のビデオ自己評価研修とその効果－援助スキル変容と心理的な変化過程から－	保 38-2, 49-56	幼稚園教員の援助の変化とビデオ自己評価法の効果を明確にし、その変化がどのような個々の幼稚園教員の心理的な変化と対応しているかを検討するため、保育者の心理面を現実・理想自己という両軸から捉え、さらにそれぞれを4因子つまり、力強さ、たおやかさ、陽気さ、真面目さといった諸側面から捉えることにより、より具体的に鮮明に教師の姿を明らかにした。
佐藤　喜代 小田　豊	2000	保育者養成における反省的実践：「園づくりプロジェクト」	保 38-2, 78-86	学生が、独創的な園を創設し、子どもの「感じる心」を育てる保育者の総合的な実践指導力を身につけることをねらいとした「園づくりプロジェクト」という授業実践を通して、学生の創った資料が園の概要説明や子どもの生活環境などを考慮し、保育者としての親へのかかわりを検討する上から貴重な示唆を得ていることや、指導者である著者が、学生による授業評価を受けることによって、学生の意見が主張できる感想文の尊重や、話し合いなどの十分な時間と空間を学生に与え、学生の気持の変化を見守ることの大切さを認識している。

高濱　裕子	2000	子どもをめぐる大人の役割と関係の認識：幼稚園教諭と母親の比較から	保 38-1, 28-35	子どもの発達に関わる母親・保育者の役割、関係性の認識について検討している。①保育者は母親と保育者の役割を異なったものとして認識していること、②大人と子どもの関係の捉え方には、大人の側に立つか、子どもの側に立つかの立場によって認識に差異があること、③母親にとっての子どもは母親と保育者で共通しているが、子どもにとっての母親は両者間で認識に差があることなどを明らかにしている。
塩路　晶子 佐々木宏子 橋川喜美代 浜崎　隆司	2001	現職保育者の大学院修士過程に対するニーズ－徳島県徳島市・鳴門市の幼稚園教諭・保育所保育士を中心に－	保 39-1, 61-68	現職の保育者が大学院教育に何を望んでいるのかを明かにするために、徳島県徳島市と鳴門市の幼稚園教諭・保育所保育士に、アンケート調査を行った結果、「保育者の抱える実践的課題を解決するのに役立つものである」ということと、「保育者自らが、これまでの教育観、保育観を問い直し、語り直すことに寄与するものであるか」ということが望まれていることが明らかになった。
岩立　京子 竹田小百合	2001	幼児や幼稚園教員に対するイメージの変容に及ぼす幼児教育心理学の授業の効果	保 39-1, 52-60	学生の幼児や幼稚園教員に対するイメージ変容に及ぼす幼児教育心理学の授業の効果について検討した結果、ビデオを用いて幼児や幼稚園教員の実態や幼児教育の特質を伝達する授業は、学生の幼児や幼稚園教員に対する肯定的なイメージを高める効果をもつが、その効果は学生の知識度や実習経験の有無、教職志向性、幼児との接触度などの違いにより、異なってくることが明らかになった。
佐伯　一弥 箙　　光夫	2001	保育者養成課程における事例検討の在り方と手続きに関する一考察－教科目「総合演習」の実践を振り返って－	保 39-1, 36-43	教科目の位置付けとねらい、そして授業展開の内容を報告し、保育者養成課程に所属する学生の素朴な声に示される諸々の気付きの根拠を検討している。そこで得られた事柄と重ね合わせる形で、保育者の専門性に関わる意義を取り出している。
高橋　敏之	2001	保育者の専門性としての造形理解と幼年造形教育学の構築	保 39-1, 20-27	幼児期の造形教育及び研究法としての実践的研究の独自性、独立性を強調し、保育実践に対応した教育方法による幼年造形の専門家教育の可能性を示した。教育実践学研究の推進、分化施設の活用による質の高い幼年教育の実現の方向性など総合的な視点から提言を行っている。
村井　尚子	2001	保育者における専門性としての「タクト」とその養成に関する一考察	保 39-1, 44-51	保育者の専門性に関して、教育学の領域で取り上げられてきた「タクト」という概念を軸に考察を進めている。保育者のタクトは経験の回顧的で現象学的な記述を通じて養成されること、また、保育者の専門性について考察する際に、「タクト」という概念が重要な役割を演じていることなどを論じている。
水内　豊和 増田　貴人 七木田　敦	2001	「ちょっと気になる子ども」の事例にみる保育者の変容過程	保 39-1, 28-35	時代の流れと共に増加傾向にある「気になる子ども」について、保育者の子どもに対する見方を視野に入れながら、その変容について子どもと保育者との関係論的な視点から記述している。「ちょっと気になる子ども」は保育者にとって自分の日常の保育を捉え直す機会を与え、通常の保育で自明の前提とされてきた子ども理解を再考する上で有意義な題材であることを示唆している。
岡田　節子 齋藤　友介 中嶋　和夫	2001	保育士の職場環境ストレッサー認知尺度	保 39-2, 73-79	保育士の職場環境に対するストレッサー認知の程度を「人間関係におけるコンフリクト認知」と「職務遂行に伴うコンフリクト認知」の側面から測定する簡便な尺度の因子構造モデルを開発し、その因子構造モデルのデータへの適合度を検討した。
田中　昭夫	2002	保育者の蓄積的疲労徴候を過重にする要因・軽減する要因	保 40-2, 24-30	心理的ストレスの理論に基づいて、ストレス源として、保育者の多忙感、親や子どもへの否定的感情を想定し、ストレス反応としての蓄積的疲労徴候を和らげる要因として保育者の効力感、ソーシャルサポートを想定して考察した結果、仮説はほぼ支持された。
樟本　千里 山崎　　晃	2002	子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性－担任保育者と教育実習生の比較を通して－	保 40-2, 90-97	日常の保育の場面で語られている保育者の言語的応答をとりあげて、担任保育者と教育実習生の比較を通して、保育者が身につけている保育的態度、専門家としての保育者の像を具体的に示している。
吉村　　香 田中三保子	2003	保育者の専門性としての幼児理解－ある保育者の語りの事例から－	乳 12, 111-122	保育者の具体的な語りの事例を通して、保育者の幼児理解の仕方を考察した。保育者は、課題意識をもって保育にあたり、保育における出来事を整理し、文脈化することが必要であることを指摘している。さらに、その課題意識および形成する文脈を、様々な手がかりや他分野の専門家との連携で修正しつつ維持することが出来てこそ保育者の幼児理解が専門性として子どもの現実に生きると論じている。
小林小夜子	2003	幼稚園・保育園・小学校における不適応児のとらえ方に対する指導者間比較	保 41-2, 32-39	幼稚園・保育所・小学校における指導者が捉える子どもの不適応像について基礎的データを収集した結果、年齢構成の差異や指導形態の差異が不適応児の捉え方に異同をもたらすことなどが明らかになった。
上田　淑子	2003	保育者の力量感の研究－幼稚園と保育所の保育者の比較検討から－	保 41-2, 24-31	保育者に期待され求められている力量を設定し、保育者がそのなかでどのような力量を重視しているのかを明らかにしている。保育者の力量観の共通性としては、「保護者との連携」をもっとも重視していて、保育所に比べて幼稚園が有意に高い項目に特徴的なのは、「保育の計画」「保育の援助」「保育の反省・評価」が保育者の展開にかかわる力量であることなどである。
浜口　順子	2003	保育者における「育ち」・「発達」概念の使用状況およびイメージの比較とその保育学的意味	乳 12, 99-110	幼稚園・保育園の現職保育者を対象に実施した質問紙調査の結果を分析し、保育現場における「育ち」の使用状況やイメージを、「発達」のそれと比較しながら、実践的保育的な発達感の方向性を探っている。

塩路　晶子 佐々木　晃 田村　隆宏 佐々木宏子	2004	保育者の中の3つの「わたし」－子どもたちとの豊かな関係性を築くために－	保 42-1, 12-18	ある男性幼稚園教師が一人称「ぼく」「わたし」「おれ」を使い分けることに着目し、その主語場面を記録し分析した。その結果、「ぼく」は「一人の人間として、自分をさらけだす」とき、「わたし」は「保育をリードする存在として子どもたちに語りかける」とき、「おれ」は「楽しさや力強さを演ずる」ときに用いられることを見出している。
上田　淑子	2004	幼稚園保育者の力量に対する園長らの評価と力量向上をうながすリーダーシップ－転勤経験をもつ保育者の前・現任園の園長らの比較分析－	乳 13, 27-36	転勤経験をもつ保育者の自己評価と、前・現任園の園長らの評価と指導を比較検討することにより、園長らの評価の実態、保育者の力量向上に果たす園長らの指導の影響について検討した。その結果、「子ども理解と援助」にもっともよく着眼している園長らの評価は、今日的力量観の浸透を示唆していること、また、園内研修、研究などの話し合いの頻度と内容が重要であることが明らかになった。
三谷　大紀	2004	保育を見る「まなざし」の変容の分析－フィールド・ノーツから見られる参与観察者と保育者の間の「対話」の展開－	保 42-2, 45-58	観察者が保育者とともに、実践に関与していく課程における、両者の保育を見る姿勢や関係の生成と変容を描写している。特に両者の保育を見る「まなざし」に焦点を絞って、考察を行い、「まなざし」が生成・変容していく課程は、保育者や観察者の熟達課程としてとらえることもできると述べている。
3　発達的な視点に立った教育内容の分析				
3－1　遊び・学び				
武田　俊昭	1995	幼児期における数の保存獲得に関する3段階指導	乳 4, 21-30	数の保存獲得に関する3段階指導の効果は、3歳児にみられず、4，5歳児に認められ、その指導効果は、3ヶ月後にも認められ、数の保存の指導による長さや多さの概念への般化は認められず、指導タイプ別にみると、部分学習は反復的部分学習法よりも効果的であることを明らかにしている。
高橋　敏之	1995	文字の習得と幼児文字の変容	保 33-2, 16-25	発生した幼児文字が正しい文字記号の習得とともにどのように変容していくのかを特定幼児の幼児文字について分析した結果、幼児文字を整然と並べてその配列（レイアウト）の美しさを楽しみたいという造形的な感覚が、書字行為の欲求に含まれ始める現象や、文字の習得段階にある幼児にとって「4」は、大人とは違う特別な見え方のする数字であることなどを指摘している。
大村　篤子	1996	幼児の生活行動からとらえた「順番」の意味	保 34-1, 63-69	「順番」としての行動の発達的変化と生活行動に反映できる「順番」の役割を検討している。その結果、自分中心的な行動は、年齢の上昇とともに減少し、約束ごととしてのルールを習慣的に活用する場面が多くなること、また、「順番」の行動に他者が介入する場合があり、特に保育者の働きかけは、自己主張の行動のルールへの従順さに移行させる刺激となっていることを明らかにしている。
岡本　拡子	1997	子どもはどのように音楽作りを試みるか－トーン・チャイムで遊ぶ子どもたちの音楽行動の観察から－	乳 6, 35-44	子どもたちがトーン・チャイムを用いてどのような行動を展開するかを観察した結果、トーン・チャイムを用いて様々な活動を展開することを明らかになった。音楽を媒体として子どもたちがお互いに気持ちを通じ合わせ、関わり合いながら音楽を作り上げていく実際をも明らかにし、このことは、子どもたちの想像性とは何かを示唆するものであると述べている。
西頭三雄児 芳賀亜希子 吉見　昌弘 坂田　憲治 鎌田　隆光 竹川　雅子	1998	「遊び」概念の共通理解について－日本保育学会の第1回～第50回の発表論文を基にして－	保 36-2, 69-76	日本保育学会第1回大会から50回大会までの「遊び」研究の流れを辿っている。研究の流れは、大きく3つの時期に区分される。1期は、1950年代まで、2期は60年代から80年代まで、3期は90年代以降とされる。1期は、「遊び」の一般的特性を概念的・理論的に把握しようとしていて、2期は、具体的・現実的な個々の遊びを取り上げ、実証的・分析的に把握しようとしている。3期は2期と違い「遊び」を第3者の立場から客観的に把握するのではなく、「遊びに参加する個々の人－ここでは子ども」の立場にたって、「遊び」を解釈しようとしていると述べている。
小山　優子	1998	幼児教育における質的研究の方法論的一試案－幼児のごっこ遊びの事例分析を通して－	保 36-2, 53-60	子どもの遊び集団におけるダイナミックスに視点を置き、分析を行った。遊びの変容過程には様々な園生活上のコンテクストが関与しており、その状況により遊びが変化していくこと、また、遊びの成員の違いや誰がどの役割をするかにより、作り出されるごっこ世界が異なること、さらに、子どもの遊びでは、遊びの枠組み自体を容易に見出したり区別したりできる状態ばかりではないことを見出している。
増田　時枝 秋田喜代美	2002	『生き餌』理解にみる5歳児の生命認識	乳 11, 53-60	『生き餌』として供する生きものの生命が絶たれる場面を示すことで、幼児がどのように生命を捉えているか、種による生命判断の相違を検討している。子どもが主体的に飼育活動に関わることは、飼育の手続きがうまく遂行できるだけではなく、対象の『生命』に関する知識を獲得していくことを示している。
榊原　知美	2002	保育活動における幼児の数量学習－幼稚園教師からの支援を通じて－	保 40-2, 39-48	教師および幼児による数量行動がどのような保育活動において認められる傾向にあるのかを調査した結果、ごく少数しか行われていないことがわかった。教師は、幼児への数量行動への援助を頻繁に行っていることを明らかにしている。
増田　時枝 秋田喜代美	2002	遊び開始時の「役」発生・成立スタイルの検討－4歳児のごっこ遊びをとおして－	保 40-1, 75-82	縦断的に捉えた「役」の発生・成立エピソードを実践的に検討し、「役」発生成立のスタイルをそれぞれの子どもに即して分析し、7つのタイプを明らかにしている。常日頃から遊びのなかで捉えられる子どものタイプを把握しておく必要性など、これらの結果が保育実践に生かされるためのいくつかのポイントを示唆している。
大藤　素子	2003	幼児に適した読み書き指導とは？－アメリカ幼児教育におけるヴィゴツキー理論の実践から－	保 41-1, 80-87	アメリカにおけるキンダーガーデンの読み書き指導の動向を探り、それに基づいて日本の保育における文字指導のあり方を検討している。

長廣真理子 加藤　泰彦 宮川　洋子	2003	幼児教育における遊びと知的発達－ボードゲーム『三目並べ』を通して－	乳 12, 53-62	4歳～7歳の日本の子どもたちの『三目並べ』の発達段階とその知的発達の内容を明らかにし、幼児教育における遊びの重要性の立証を試みている。特に、『三目並べ』が数的思考、空間的思考、時間的思考といった知的発達の内容に加えて、社会的情意的要素を含んだ競争的な意識や役割関係についての思考力も発達させ深化させるものであると述べている。
緑　間　科	2003	「みたて」遊び論の再構築－パース記号論による解釈の提案－	保 41-1, 12-19	子どもが遊びの中でものごとを「みたてる」プロセスに注目ている。従来の結果主義的「みたて」論をもとに、子どもがものごとを段階を経てしだいに「みたてる」プロセスを分析し、保育者がその過程に丁寧に寄り添うことの大切さを強調している。
飯塚　順子	2003	デューイの「自由な遊び」における「精神的態度」について	保 41-1, 29-35	保育における「自由な遊び」の本来の意味を明かにするために、デューイの「自由な遊び」における「精神的態度」の意味を考察した。
福井　晴子	2003	折り紙遊びの歴史的側面と幼児教育における現代的意味	保 41-1, 29-35	折り紙遊びが江戸時代に庶民の子どもの遊びに導入されて以来の発展の歴史を詳細に解説し、その幼児教育における意味を考察している。
倉持　清美 柴坂　寿子	2003	仲間遊びに対するある園児のイメージの変容	乳 12, 1-10	入園当初、保育者と観察者から仲間との遊びは多いが「楽しくない」表情をして仲間と遊んでいたが、その後「楽しく遊べるようになった」と捉えられた子どもを対象児とし、仲間との遊びへの取り組み方の変化を「仲間との遊びに対するイメージの変容」という視点で捉え、「楽しくない」表情で遊びに取り組んでいた頃のイメージ、「楽しい」表情で遊ぶようになった頃のイメージを、各々検討し、イメージの変容を促すことになった仲間の影響について考察を行っている。
湯澤　美紀 鳥光美緒子	2004	3歳児の学びの姿を探る－水プロジェクトを中心に－	保 42-1, 71-80	3歳児の学びのプロセスに注目し、観察記録の分析を行い、3歳児を含めた幼児を有能な学習者とするためには、保育者が単に子どもの自発的遊びをともにする受動的役割にとどまらず、学びの機会や仕掛けを主体的に提供していく必要性があることを指摘している。
杉本　直子	2004	幼児の心の理解におけるふり遊びの役割－物の見立てに注目して－	乳 13, 61-68	共同的提案や役割演技や役割当てのような社会的ふりに加え、物の見立てのようなふりも含めたより多様なふりと心の理論の関連を縦断的に検討した。心についての理解は加齢を伴って発達するという結果が、縦断的な調査からも同様に得られ、また、ふり遊びやごっこ遊びが、認知的な発達、特に心の理解の発達を促す機能を持つことを示した。
3－2　言葉				
横山　洋子	1998	子どものことばが生まれる背景としての空間－ことばの視点からの保育場面の考察－	保 36-2, 38-44	子どもが経験している「空間」という観点から具体的な状況における子どものことばと、ことばの発生を考察し、「空間」とことばの関係や「空間」という背景を変更する保育者の働きかけの可能性について検討した結果、保育者が、子どもの「主観的な空間」を理解し、それを変える働きかけをすることにより、ことばの背景も変わり、ことばが生まれる可能性をひらくことが示された。
三宅　茂夫	2000	幼稚園における言語による社会的機能と遊びとの発達的関連性	乳 9, 61-70	遊びと言語の社会的機能の関係や発達を調査した結果、遊びと言語の社会的機能は互いに関係を持ちながら発達することが把握された。幼稚園において教師が、そうした結果を意識し、幼児がより遊びを発展させながら生活できる環境を創造することが求められると考察している。
三宅　茂夫	2001	幼稚園における言語の社会的機能と遊びの発達過程	乳 10, 41-54	先行研究の結果から生じた課題について、先行研究後概ね1年が経過した幼児の言語の社会的機能と遊びの社会的交渉の発達を継時的に比較した結果、幼児の生活における言語や遊びの発達は、学年差異により異なった様相を示すことがわかった。言語コミュニケーションの生成や相互に社会性を発揮した遊びがなされるための環境構成が、それぞれの時期に合わせて配慮されなければならないことを示している。
西野美佐子	2002	両親の共感性が言語的対処法に与える影響に関する研究	保 40-1, 46-53	共感性を備えた人とそうでない人との、ほめ方叱り方の違いや、共感性が育児場面の違いによって受ける影響、さらにことばを差し向けた子どもの性別・年齢・出生順位による親のことばかけの影響の違いなどを検討している。
3－3　表現（音楽・描画）				
高橋　敏之 久保由美子	1995	特定幼児の幼児文字・第1期の書字パターン－発生から平仮名獲得まで－	乳 4, 31-40	幼児の描画活動を観察し、その中に描画とは異なる文字のようなものが見られることがることに着目し、特定児の幼児文字を対象に分析した結果、書字パターンは、発生したパターンが変容していくのではなく、先に存在するパターンの字形を残しながら分化する形で多様化し、それが幼児文字の書字パターンとして定着してゆくことを明らかにしている。
高橋　敏之	1996	頭足人的表現形式に関する選考研究の問題点Ⅰ	乳 5, 15-24	6名の研究者の頭足人型に対刷る見解、立場、理論、学説といったものを取り上げて、比較研究した結果、それぞれが構造特質の違う頭足人型を指して、それぞれに自分の考えを記述していうることを確認している。
高橋　敏之	1997	一幼児の人間画に見られる頭足人的表現形式の変異性とその発達的変化	乳 6, 65-74	一人の幼児が描く人間画を全て収集することによって、そこに発生する頭足人型の発達的変化を探る第2報である。対象児の頭足人型の後半を時間軸に沿って考察し、対象児の頭足人型の後半を8つのバリエーションに分類し、変容過程を示している。

遠藤　晶	1998	幼児の手あそびにおける音楽的発達について	保 36-1, 36-43	手遊びを日常の生活の中での自然な音楽環境と捉え、歌と動きが融合した活動を快く楽しく反復することで幼児の音楽的能力の発達が促されるとの先行研究をもとに、手遊びにおける表現をＶＴＲで録画し、その観察をもとにした資料と統計的分析を使って客観的な結果と考察を行っている。また、人との関わりの重要性に注目し、幼児の音楽表現に影響をおよぼす根源的要素としての子どもと手遊びをする人、つまり保育現場では保育者の存在と役割の重要性について指摘している。
細田　淳子	1998	音楽表現の原点としてのつぶやき歌	保 36-1, 12-19	①子どもがつぶやき歌を歌い始める状況及び理由、②つぶやき歌を歌っている時の声の様子、身体の動き及び表情等、③つぶやき歌を歌う同じ時期であっても自発的に歌うつぶやき歌と、大人の要求に応えて歌う時や、集団で歌う時の声の様子の違い、を検討している。保育者は、これらのことを知ることによって子どもの“うたいたい気持ち”を大切にした保育が展開でき、義務的に朝だから朝の歌を歌うというようなことがなくなると指摘している。
古賀　松香 無藤　隆 伊集院理子	1998	幼稚園児における自発的な“歌”とその出現場面との関連	保 36-1, 20-27	幼児の歌が歌われた状況、文脈を分析することにより、遊びや園生活の流れがどのようになったときに幼児は歌を歌うのかを考察している。子どもの“歌”は遊びや活動状況と深く結びついて、生活の中に織り込まれているものであり、研究においても、幼稚園の場においても、“歌”だけを取り出すのではなく、子どもの活動の流れや文脈の中で“歌”を捉えることが、子どもにとっての“歌”を捉える上で重要であることを指摘している。
岡本　拡子	1998	保育者と子どもたちの間でかわされる音楽的なことばのやりとり	保 36-1, 28-35	保育者と子どものやり取りを、音楽的視野でとらえようと試みている。その時の「はなしことば」の持つ音楽的要素は、ことばのやり取りを通して子どもに伝わり、やがて子どもたちがより組織立てて音楽表現を行う際の「直観的学習」の基礎となるべきものであると述べている。子どもの内から表れ出た音楽表現の姿を重視し、保育者が無意識に行っていることばを通しての音楽的な働きかけや、その役割を担う保育者の存在や保育のあり方の重要性を指摘している。
井戸　和秀	1998	幼児の歌唱におけるどなり声に関する一考察	保 36-1, 44-51	どなり声を強く否定せず、まずどなって歌う、そのメカニズムを知ることで、子どもの表現と心性の関係を理解し、さまざまな表現を考えようとしている。どなり声は一斉活動で起きやすいとされている。しかし、著者は一斉で歌うことの可否ではなく、保育者の態度、ことばかけ等に問題があると指摘し、どならずに歌うことができるための配慮すべき事項を事例を通して具体的に示している。
名須川知子	1998	幼児の音楽表現における身体の動きの意味	保 36-1, 52-58	音楽表現における身体の動きの機能を分析し、その結果を、ダルクローズ・メソッドとオルフの考えによって考察している。子どもの自発的なあそびの姿を両者の理論から得たものをよりどころとして観察し、子どもの音楽表現について探求している。
吉田　若葉	1998	子どもの音楽表現にみられる解放と共感	保 36-1, 67-74	子どもの音楽表現にみられる開放と共感について、８事例を示して考察を行っている。子どもは音楽表現を楽しみながら、その中で開放と共感の学習をし、音楽を感情表現として扱うことで子どもたちが自分の気持ちを知る機会が与えられるという点においても、音楽表現の価値が認められることを指摘している。
芦澤美奈子	1998	幼児の音楽表現に関する一考察－オルフ・シュールヴェルクの可能性をめぐって－	保 36-1, 75-81	オルフの理念を保育の場での音楽表現活動に生かす可能性について論じている。前半ではオルフについての論述をわかりやくまとめ、後半は、それに基づくエレメンタールな表現の実践例と考察を取り上げている。
斎藤　裕	1999	幼児の空間表象・表現様式に及ぼす場面設定の重要性－鉛直線描画を例に－	保 37-2, 39-46	幼児の空間表象・表現様式の課題によるその違いを調査した結果、描画様式は単なる一般的心性の発達段階によって決まるのではなく、むしろ、課題状況に依存している、つまり、その課題に対する既有知識やルールの影響の下に決定されるということを物語っているとしている。また、この事実から、保育者にとって重要なことは、「どのような経験を用意し、させているのか」を自覚することであり、それが、「幼児たちとむきあった保育」であると述べている。
深田　昭三	1999	年長女児の描画に描かれた内的世界	保 37-2, 31-38	行動が不適応を示している年長女児を対象に、女児が８ヶ月間に描いた描画を収集し、これを手がかりにして絵の中に表現されていた女児の内的世界の理解を試みている。女児の描画の中心的テーマが「外出－困難－到着」であることから、女児の困難な時期に、この内から外へ向かう物語を描くことに熱中していたこと自体が、幼稚園という外なる世界の中で、描画による内なる世界の構築と見ることができること、また、女児にとって絵を描くことは、自分の未来を探るための自分自身との対話であったのかもしれないと考察している。
岡林　典子	2000	言語習得期の子どもにみられる音楽的表現－－幼児の15～18ヶ月における行動観察から－	乳 9, 13-22	１歳児の音楽的表現に注目して事例分析を行い、以下のことを明らかにしている。言語習得期の子どもは、①微笑みや視線を交わす、或いは喃語を発するなどの行為によって、母親や親近感を抱いている特定の人物とのコミュニケーションを保ちながら、音楽的にバランスのとれた心地よい音響構成を作り出そうと、能動的な表現活動を試みている。②言葉の意味を理解する以前から、言葉のもつ音響面に敏感に反応し、他者と呼吸を合わせることやリズムを同期させて声を合わせることなどを、人との相互交渉を通じて直観的に学んでいる。③音楽表現は、喃語表現や言語表現、即成曲の部分表現などと関わり合いながら発達している。
岡林　典子	2003	生活の中の音楽的行為に関する一考察－応答唱《かーわって・いいよー》の成立過程の縦断的観察から－	保 41-2, 50-57	保育園や幼稚園の集団生活の中で頻繁にみられる順番交替の場面に焦点を当て、子どもたちがどのように応答唱を成立させていくのかその実際を示すことによって、応答唱が音楽的行為そのものであることを説明している。

細田　淳子 小野　明美	2003	ことばの獲得初期における音楽的表現－乳児はどのようにしてうたい始めるか－	保 41-2, 58-65	乳幼児がうたい始めるまでの様子を音楽的表現の視点からとらえて、乳児の音への興味などについての考察を行っている。うたい始める時期と、ことばを獲得する時期の関係についてその獲得の時間的順序についての考察を行ったが歌が先であるとも、ことばが先とも言えない結果となった。
槇　　英子	2003	幼児の表現活動に見られる「表現スタイル」－現場（フィールド）からの理論構成の試み－	乳 12, 75-88	実践知からの理論構成の方法論の提示と、その方法論の妥当性を示すこと、さらに方法論と理論の保育現場に対する実践的還元を目的として調査した結果、理論構成の方法論の提示と、個性に応じる具体的な方法論の提示は、それぞれの個性に応じた発達への足場づくりに寄与し、豊かな表現活動を育む保育実践の創造に役立つことを示唆している。
小山　朝子	2004	乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現－未満児の事例を通しての考察－	保 42-2, 25-34	子どものコミュニケーションとしての音楽表現について、未満児の事例を通して考察している。領域「表現」は、子どもを総合的に捉えていくことが必要であり、身近な大人がそれをしっかりと受け止めて丁寧に応じていくことは、表現する力を育成するだけでなく、コミュニケーション力の基盤を築いていく手段となることを明らかにしている。
奥　美佐子	2004	幼児の描画過程における模倣の効果	保 42-2, 59-70	幼児の描画過程における模倣の実態を事例を通して明らかにするとともに、模倣の特質について再考し、幼児の描画過程における模倣の効果について検討を行った結果、幼児のタイプによる模倣の特性が明確になり、各タイプの幼児が模倣をどのような目的で使用したかが示された。
槇　　英子	2004	幼児の「表現スタイル」に配慮した保育実践	保 42-2, 35-44	「表現スタイル」の枠組を用いた具体的な実践を報告し、実践から、その妥当性と有用性を再検討することを目的として考察を行った結果、「表現スタイル」の適用の有用性が支持された。
3－4　認知・自己と他者・社会				
姜　信　善	1995	子どものリファレンシャル・コミュニケーションにおける視点取得の役割	乳 4, 57-66	R. Cにおける視点取得の役割に注目し、視点取得の概念の問題を検討し、見出された視点取得の発達プロセスに基づいて視点取得の構造的妥当性を検討している。また、視点取得の個人差に感関連した要因として年齢を取り上げて、視点取得との関連を検討した結果、R. Cにおいて視点取得の役割はかなり重要であることを示している。
田代　高章	1996	幼児期における「自己決定」能力形成の意義	保 34-2, 73-80	子どもの権利における「自己決定」の位置づけを英米の権利論に依拠しつつ考察した結果、幼児教育も含めて教育的に重要なことは、権利としての「自己決定」能力を幼児期からいかに形成するかという点と、理念的には、子どもの保護の必要性を認識しつつも、さらに進んで子どもの「自己決定」の能力をいかに形成しうるかに保育課題があると論じている。
齋藤　政子	1996	3歳未満児の生活活動における見通し能力の発達と保育－1歳児クラスの生活活動の観察を通して－	保 34-1, 53-62	分析を通して、生活活動における見通し能力は1歳半前から1歳後半にかけて大きく変化することを明らかにし、見通し能力を支え、育てるために、人的環境と物的環境を整えることが必要だが、それとともに、リズムとアクセントのある生活活動を組織することが、乳幼児の意欲と自主性を引き出す上でも重要であることを指摘している。
服部　照子	1997	幼児後期の言語性・非言語性LDの認知・情緒の特徴の比較－ロールシャッハ反応から－	乳 6, 45-56	ロールシャッハ・テストを用いてLDのサブ・タイプ、言語性LDと非言語性LDの認知・情緒の特徴をみている。その結果、社会的態度には問題がないことや、両LDサブ・タイプ共に、知能水準は標準範囲にあるにもかかわらず、認知自体と、認知の言語化は著しく低水準であり、非言語性LDは易刺激的、気分易刺激的で、仔細な刺激で強い情緒反応をおこしやすい、など、いくつかの結論を得ることができた。
田森三佳子	1998	幼児の目を通してみた自己と他者との関わり－一人の幼児が記した一年半の日記から－	乳 7, 25-34	縦断的分析により、幼児の他者との関わりに特徴的な変化が現れる時期が4歳児の3学期に当たる冬季と5歳児の夏季休暇を含む夏季であることを見出している。いずれも保育園の休暇を含む時期であり、単に生活スタイルの影響を反映している可能性があるとしても、何らかの成長の節目を示している可能性が高いことを示唆している。その他にも、他者との関係形成の段階的変容を見出している。
小谷　正登	2000	幼児の象徴能力が愛他行動に及ぼす効果	保 38-2, 68-77	個々の幼児の象徴能力の程度と遊びの関係を明らかにするため「ごっこ遊び」などの遊びそのものと象徴能力との関係を検証している。また、障害児と他の園児との交わりの状態を観察して、実際に実行される愛他行動を評定し、その内容と象徴能力との関連を検討した結果、幼児の象徴機能を用いた遊びによって象徴能力が発達すれば、役割所得能力が高まり、向社会的行動（愛他行動）に積極的に影響を与えることが確認された。
古市真智子	2002	幼児期における母親に対する認知	保 40-1, 54-63	幼児は母親の行動を母親自身の認知する言動と比較してどのように認知する傾向にあるのかについての検討を行った。その結果、母親が子どもの要求を認めないとき、母親は「なぜ」認めないかに注目するのに対し、幼児は「何を」認めないかに注目する等、母子の認知のズレが明らかにされ、幼児期における母親の言動に対する認知の傾向が示された。
佐久間路子	2002	子どもの「他者から見た自己」に関する理解の発達	乳 11, 23-32	幼児（5歳児）と小学校2年生、4年生を対象に、他者（母親、仲の良い友達、先生）から見た自己における他者の視点に応じた抽出内容の差異およびその発達差を検討している。その結果、母親から見た自己の抽出が、友人や先生から見た自己の抽出よりも多く、抽出内容については、行動に関する抽出が最も多いことを明らかにしている。発達差に関しては、行動と人格特性に関する抽出は5歳児よりも小学生の方が多いという、従来と一致する結果を得たが、身体的・外的属性に関する抽出については、5歳児の方が小学生よりも抽出が多いという結果は見られなかった。

湯澤　美紀 倉盛美穂子 入江　慶太 山崎　　晃	2002	養育者の生き方の志向性と幼児の社会化との関連－個人志向性・社会志向性に着目して－	乳 11, 1-10	養育者の生き方の志向性によって、子どもの攻撃性ならびに愛他性が影響を受けるかどうかについてを検討した結果、社会の規範に則った生き方をめざす養育者の社会志向性は、子どもの攻撃性との関連は見られたものの、子どもの愛他性については関連がみられなかった。また、子どもの相互作用場面（対人葛藤状況・他者困窮状況）で行われる養育者の言語介入に養育者の志向性のタイプによる違いは見られなかった。
中台佐喜子 金山　元春	2002	園と家庭における幼児の社会的スキル及び問題行動	乳 11, 61-68	幼児の社会的行動を社会的スキルと問題行動の側面から調査して、幼児の社会的行動を園と家庭の両場面から捉え、両者の関係について探索的に検討した。その結果、園と家庭における幼児の社会的行動にはいくつかの点で関連性が示された。
福崎　淳子	2002	「みてて」発話からとらえる幼児の他者意識－見せたい相手はだれか－	保　40-1, 83-90	「みてて」発話後に向ける発話者の視線に注目し、見せたい相手は誰かを検討し、発話者の見せる行為に込められた思いの一側面を分析し、他者へむける意識のありようを考察した。その結果、「みてて」発話には、発話者が本当に見せたいと思う相手の状況や心の動きを推測し、その相手を意識しながら、より効果的なアピールを引き出す操作がなされている。
伊藤　順子	2003	幼児はいかに向社会的行動をふり返るか－向社会性についての認知との関連から－	保 41-2, 75-82	向社会性についての認知の個人差と、行動結果についての情報処理との関連を検討している。幼児に行動結果を内的あるいは外的要因に帰属するか選択させた結果、内的要因への帰属と向社会性についての認知との間に関連が示された。また、原因帰属について大人からの手がかりや誘導がない場合、幼児は、行動結果について独自の情報処理を行っていることなどが示唆された。
3－5　道徳・思いやり				
大倉三代子	1999	自立的な道徳性の発達と保育	乳 8, 33-42	乳幼児教育における道徳教育を発達心理学と乳幼児教育学の両面から検討している。乳幼児の道徳的心情、道徳的判断、道徳的行動、道徳的態度、道徳的意欲は母子関係や仲間関係、および道徳的雰囲気が関係しており、道徳的雰囲気とは、乳幼児が安心して受け入れられ、尊重されていると感じられる場であるとしている。また、道徳的雰囲気は、道徳教育の基本的な要素といえ、保育場面の観察記録の分析から、管理的な保育に対して、民主的な保育は道徳的雰囲気をもち、子どもたちは道徳的な行動を表出していることを明らかにしている。
白川　蓉子	2000	幼稚園における幼児の道徳性の芽生えと人間関係－神戸大学発達科学部附属幼稚園の実践研究の検討をとおして－	保 38-1, 53-60	附属幼稚園の実践研究を踏まえ、幼稚園における「人とかかわる力」と「道徳性の芽生え」を支援する幼稚園教育のあり方を探っている。幼稚園の道徳性のねらいは、自分の心と身体を大切にすること、共同生活のなかで他の幼児と関わり、自分と同じように、他の幼児の心と身体を尊重することを学ぶこと、幼稚園での共同生活に必要な最小限の意味あるルールを守ることであると述べ、道徳性の芽生えは、究極的には「人とかかわる力」に行き着くとしている。
劉　洋　洋	2003	幼児の「思いやり」意識に関する研究－日本と中国の４歳児、５歳児の比較を通して－	乳 12, 123-132	幼児の「思いやり」意識を調査するために、日本と中国の幼稚園のカリキュラム内容から共通する内容を選び出して、人への「思いやり」を必要とする６つの場面を設定し、日本と中国の４歳児と５歳児、合計１２０人に対して調査を行い、比較検討した結果、その特徴をまとめている。
3－6　幼児教育・保育過程				
岸井　勇雄	1995	保育における内容概念の研究	保 33-1, 12-17	幼稚園教育、保育所保育における公的な保育内容の変遷にみられる内容概念の質的な転換を検証し、現行の幼稚園教育要領においては、保育内容のすべてが幼児自身を主語とする発達の姿で表わされており、発達の主体である子どもの内的経験が保育の実質であるという理念が打ち出されていることに転換を認めている。
佐木みどり	1995	幼児の日常的行動の発達と保育内容についての実践研究	保 33-1, 18-26	園生活において、自ら仲間に入ろうとし、仲間に入るまでの行動を実践的観察によって記録した一事例を取り上げ、子どもの育ちにとって意味のある経験とは何か、を模索している。対象児の仲間入りの行動の変容が観察されている。必要な環境構成や援助を可能にしたのは、事例協議の場を持つことによって、担任が対象児の興味や関心の方向性と自分のさせたい活動とのズレに気づいたことによると考察している。
稲葉　宏雄	1995	幼児教育における到達度評価試験	乳 4, 1-20	幼児教育における到達度評価実践の可能性とその方向性を検討している。学力の構造と機能について、認知的諸力（知識、理解、分析、総合、応用等）、技能的習熟（操作、運動、労働、計算、演奏等）、情意的性向（特質）（興味、関心、態度、意欲、価値観等）、学力の重層構造（人格の基本的構成要素（実態）、人格の働き、機能の基礎（機能））としてまとめ、学力は、学習者の認知（認識）、技能、情意の全体にわたる、或いは、その全体を内容とする概念であり、学習者の人格の内実を構成する概念ということができると論じている。
山田　陽子	1998	Ｎ子にとって『まねる行為』の意味するものについて	保 38-2, 94-98	８歳の女児１名を対象に、まねる行為の意味するものについての考察を行っている。差し出されたものを受け取ることに抵抗のある対象児は、まねることが、主体的でありつつ、相手の行為を受け取ることのできる方法だった。また、対象児は、相手の行為をまねることで、自分の殻を破っていった。対象児にとって『まねる』とは、人との関係を広げようとすることであり、自分の可能性をひらいていこうとすることであったことを見出している。
金田　利子 岡林由紀子 山岡三佐子	2000	保育の中で発達の危機をどうのりこえるか－自己コントロールできない自分をみつめる「４歳児」の分析をとおして－	保 38-2, 17-25	子どもの活動、保育者の指導、クラスとしての子ども集団の関連的な営みを保育過程として捉え、保育の方法のあり方について考察している。個の自己主張の強いと思われる子どもも、十分にその時期を保障することによって、自ら他者との接近要求を示す時期があり、それを越えて自己コントロール期に発展できるという方向性を検証している。

岡野　雅子	2003	いきいきと遊ぶ子どもの時間的側面について－20年間の変容－	保 41-1, 54-62	保育園児の中からいきいきと良く遊ぶことの多い子どもを「イキイキ群」に、その逆の子どもを「非イキイキ群」に抽出し、保育者による日ごろの子どもの観察に基づく行動評定から、いきいきと遊ぶ子どもの時間的側面について探り、また20年間の変容の様相を明らかにした。その結果、今日の生活環境においても多くの子どもがいきいきと遊んでいて、その子どもたちは20年前と同様に充実した内的時間を体験していることがわかった。
3－7　健康・運動・身体・栄養・発達病理				
原田　昭子	1995	幼児期における呼吸機能の発達と栄養	乳 4, 41-46	呼吸機能の発達と影響状態の関係を考察した結果、子どもたちの食物摂取状況からみると、彼らの成長や発育に必要なエネルギーの摂取量は適正であったが、子どもたちの呼吸機能の発達には、運動は欠かせないが、食事も量だけでなく、エネルギーの供給源とそれらのバランスや微量栄養素まで考慮した食事の内容・質が需要であると述べている。
無藤　　隆	1996	幼稚園の運動会における運動することの意味：リレーの練習の分析	乳 5, 25-34	筆者はある幼稚園でのフィールドワークを1年間行い、観察とインタビュー、園内研究会への参加等による資料収集を行った。運動会のリレーの練習や遊びの光景の観察と、それをめぐって園長を含めた保育者との話し合いを行い、理論的な考察を行った。その考察の妥当性を探るために、運動会に関わる、現代日本の幼稚園の主な考え方と推測されるものと比べ、歴史的な考察と比較している。さらに、「身体性の社会学」の理論との関連において結論をまとめている。
讃岐　忠彦	1996	乳児発達と自閉症	乳 5, 1-14	大学付属の発達クリニック乳児観察室部門での観察記録と、発達臨床部門での自閉症の臨床記録を通して、乳児発達のパラダイムや自閉症の発達病理について考察を行っている。乳児発達は情動的自己の対人的関係づけ、つまり、関係性を中心に個としての発達があり、相手と共存するものとしての発達が保証されることから、こういった点に機能不全をもつものが自閉症であると述べている。
前橋　　明 石垣恵美子	2001	幼児期の健康管理－保育園児の園内生活時における体温の変動－	乳 10, 73-80	保育園児の体温と生活や運動あそびとの関わりについて調査・検討し、生活と健康管理のための体温の位置づけについて明らかにするために、幼児の体温の推移を測定し、運動実施による体温の変動との関係、ならびに、健康チェックとしての体温測定の意義を検討した。幼児の午後9時の平均体温は、6.7月から11.12月にかけて低下し、その後、上昇し、季節により変動することや、登園時の体温が37.0℃以上の幼児は、日中の園内生活時において、常に高い体温レベルを維持していることなどを明らかにした。
吉田伊津美 杉原　　隆	2002	幼児の運動遊びが有能感および園での行動に及ぼす影響に関する因果モデルの検討	保 40-1, 91-99	運動遊びが有能感を媒介して園での行動に影響を与えるという認知理論的な枠組みにしたがって因果モデルを構築し、そのモデルの妥当性及び有能感尺度の妥当性を共分散構造分析を用いて検討した。運動有能感と自己抑制については、運動遊びに多くみられるルールや競争といった特性が、運動有能感を介して「自己主張」に対しては促進的に作用するが、「自己抑制」に関しては影響を及ぼさない可能性が示唆された。
吉田　和人	2002	幼児のボールキック運動の特徴	保 40-2, 49-56	幼児のボールキックについて、蹴り足のスウィング速度、蹴り出したボールの速度などの量的特徴、および動作パターンなどの質的特徴を明らかにし、幼児に多いつまずきやその原因を検討することから、運動発達を考慮した援助の際の留意点を考察した。
足立　　正	2003	幼児の立位における蹴動作の発現と片足身体支持能力の発達	乳 12, 43-52	蹴動作の発現と片足身体支持能力の発達について、月齢13ヶ月から29ヶ月の幼児31名の蹴・走（速歩）・跳動作を高速ＶＴＲカメラで撮影し、各動作の片足身体支持時間と滞空時間について計測、分析を行い、走・跳動作の関連を明らかにし、さらに動作発達の特徴について検討している。
田中　千恵 佐久間春夫	2003	人物描画法における幼児期の Body Image の特性について	乳 12, 11-20	身体の15部位から幼児の人物画の分析を行い、ＤＡＭ法から幼児期の body image の特徴について明らかにした。身体部位の認知については、年齢と性別に関連があり、特に5歳児の女児が最も身体部位の認知が高く body image の形成が高いことから、body image をより意識していることなどを明らかにしている。
4　保育の今日的課題				
4－1　子育て支援				
田中　昭夫	1997	幼児を保育する母親の幼児不安に関する研究	乳 6, 57-64	育児不安の高い母親に対して、夫や家庭以外の人々といった家庭内外のソーシャル・サポートを増加させるような施設や制度が必要であること、さらに、落ち着いて育児に取り組める職場復帰可能な育児休業制度は、育児不安の軽減に有効であることを明らかにし、今後、その一層の拡充の必要性があることを示唆している。
田中　昭夫	1997	育児相談電話に寄せられた育児の悩みの内容分析	保 35-2, 102-109	育児相談電話をより適正化していくために、いくつかの示唆を得ている。①相談員には、小児保健・小児医学・看護の領域の知識及び経験がかなり多方面にわたって必要とされること。②子育ての具体的実態に基づく相談が多いので、共感的に対応するため、経験豊かな相談員が適当である。③専門的知識を必要とする場合には、他機関を紹介したり、委託することが必要。④保育所では、電話の設置場所の工夫、設備の改善が必要。⑤各種の育児相談電話の存在が周知され、気軽に利用されているという状態ではない。今後、各地のきめ細かい育児情報を収集し、インターネットを通じて発信していくことも育児援助として必要であることを提案している。
山口　美和	1998	子育ての悩みに関する母親の「納得」の仕方とその役割－子育てにおけるセカンダリーコントロール－	保 36-2, 61-68	母親自身が子育てに関する悩みをどう扱っているかということ検討した結果、母親たちが毎日の子育ての中で起きてくる様々な出来事に対し、それを受け入れる方向での考えを見出すというセカンダリーコントロールを頻繁に駆使していることを見出している。

笠原　正洋	1999	保育者による育児相談への保護者の意識	保 37-2, 63-71	保育者に相談する内容として、「母親関連育児ストレス」「子どもの行動や性格上の悩み」「発育の遅れ」「習慣的行動の悩み」の 4 つの因子を得ている。また、理想とする相談相手が相談内容によって異なっていることや、育児相談において、相談したい保育者に求められる特徴としては、「カウンセリングの態度・助言」「相談しやすい人柄」「指摘の明確さ」「専門知識や経験」の 4 因子を見出している。他にもいくつかの結果を得ている。
鈴木佐喜子 堀江まゆみ 若松美恵子 喜多村純子	1999	保育者と親の食い違いに関する研究－保育、子育ての問題を中心に－	保 37-2, 72-80	保育者と親の子育て認識の相違に関する調査の結果から、親と保育者の食い違いを考察している。親が「食い違い」を最も強く感じるのは「子ども同士の関係」を中心とした自分の子どもの問題であること、また、親の自己評価「親としての自分の姿」と保育者から見た「今の親」像が異なること、さらに、親と保育者がお互いの考えを知らず、食い違いがあるかどうか分からない場合があること、などを明らかにし、食い違いを感じる保育者と感じない保育者の違いがどこから生まれるのかを考察している。
埋橋　玲子	2000	ＵＫにおけるチャイルドケアの戦略－わが国における保育サービスの多様化への示唆を求めて－	乳 9, 23-30	UK における近年のチャイルドケア政策の特徴を概観し、地域の実情に応じて、様々な社会的リソースの組み合わせが実行されていること、また、保育の質は視察制度によりチェックされ、保育者の資質に依存しており、QCA, NTO による訓練機会の整備と職業資格の相互の位置付けを行うことで資質向上をはかっていることなどを報告し、わが国の保育サービスの今後の方向性を求める上での手がかりを示唆している。
藤後　悦子	2001	保育現場における心理相談員の役割－心理相談活動のプロスペクティブ・スタディー	保 39-2, 66-72	心理相談活動が保育現場に導入されることによる、保育現場の変容過程を考察している。心理相談員の導入は保育現場にとって画期的なことであり、その有効性を明らかにすることにより今後の保育現場の方向性に示唆を与えるものになると示唆している。
神田　直子 山本　理絵	2001	乳幼児を持つ親の、地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究－子育て支援事業参加者と非参加者の比較から－	保 39-2, 80-87	愛知県内の子育て支援センターがある市町村に住む乳幼児を持つ親のうち、子育て支援センター事業に参加している親と、していない親とを調査対象として取り上げ、それぞれの親の家庭状況、支援要求、育児に対する感情、他の支援機関の認知や利用などについて調査し、両群の親の比較検討を行っている。
園田　菜摘 無藤　　隆	2001	幼稚園「預かり保育」に関する研究：保育の質と子どもの様子	乳 10, 33-40	特定の地域での預かり保育の実施傾向の全体像を明かにし、さらに、預かり保育を行っている複数の幼稚園を対象とした保育の質、子どもの発達の様子の調査を行うことにより、子どもの発達的観点から見た預かり保育の検討を行っている。実施されている預かり保育では、ある程度の質の高さが維持された保育が行われていること、また、子どもの発達にとってもプラスとなる面が大きいことが示唆された。保育環境の質、保育者や他の子どもとの相互作用など、子どもの発達を阻害する可能性は見当たらなかった。保育者や養育者から見ても、子どもの発達を阻害するどころか、逆に子どもへのプラスの影響を強調する結果となった。
埋橋　玲子	2001	ＵＫのあるコミュニティ・ナーサリーに見る親のインヴォルメント	乳 10, 55-64	イギリスのペングリーン・センター（コミュニティー・ナーサリー）の概要や保育の様相や特質を明らかにし、親のインヴォルメントに関するまとめを行い、わが国における保育実践と子育て支援に対する示唆を得ている。
高橋　千草 河野　真紀 岩立　京子	2002	子育て支援活動が虐待傾向をもつ母親と子どもに及ぼす影響	保 40-1, 21-28	育児支援活動に長期にわたって参加した虐待傾向をもつ母親とその子どもを対象に、母子の変容過程を研究している。結果として母親の虐待的行為の顕著な減少とはならなかったが、母親の発する言語的表現の中に子どもへの可愛さ、いとおしさなどの情愛の発現が多くなったこと、また子育てグループへの参加を通して、自己への気付きや振り返りが可能となるなど、母親の心情的な内的変革が現れる成果を生み出した。
中谷奈津子	2002	虐待の世代間連鎖と子育て支援事業の認知に関する研究	保 40-1, 29-36	虐待の世代間連鎖と子育て支援事業の情報の認知を質問紙調査した結果、子育て支援事業は、情報量という観点から見れば、育児不安や児童虐待といった問題に十分対応しうる可能性を秘めていることを示唆している。
榎田二三子 諏訪　きぬ	2002	子育て支援のあり方の再検討	保 40-1, 37-45	自由記述の質問紙法を使用して、「子育て中の専業主婦のストレス」を「育児ストレス」ととらえ、母親の主体的生き方の形成とつながる子育て支援の問題を追及した。母親のライフサイクル全体を考慮して、母親の生き方や家族関係についての隠されたストレスにどう対応していくかが、子育て支援のあり方を再検討する際の重要な視点となることを示唆している。
土谷みち子 加藤　邦子 中野由美子 竹田　真木	2002	幼児期の家庭教育への援助	保 40-1, 12-20	保育者の認知する親子の様子と家庭への子育て支援とが、どう関連しているのかを検討した結果、乳幼児期の独自性を親と保育者が認識すること、人間としての成熟をはかること、ノンバーバルな行動への感受性を親が高めることができるように援助すること、の主要な 3 つの提言を行っている。
藤後　悦子	2003	保育現場における心理相談活動の事例－地域の子どもとその親への個人面接、親子保育体験、一時保育を利用した支援方法－	保 41-2, 83-92	心理相談員による個別面談、親子保育体験、一時保育などの保育現場が有するそれぞれの資源を統合することで独自の育児支援システムを構築した。事例の分析を通して統合的な育児支援サービスの可能性を明らかにしている。
4－2　統合保育				
吉川はる奈	1995	個々の子どもの立場から保育を再構成する取り組み	保 33-1, 47-51	保育がスムーズになされていないと保育者が感じた 2 歳 9 ヶ月（入園年齢）の発達遅滞を主訴とする幼児の事例を通して、個々の子どもの立場に合った保育を行うために必要なのは、保育内容を再構成していくプロセス、すなわち個々の子どもで異なる園の役割を捉えていく取り組みの過程であるとしている。

名倉啓太郎	1995	幼児の発達の理解と保育内容の基本的諸問題	保 33-1, 68-73	一人一人の特性に応じ、その子どもが育ちつつある発達に適した個別化された保育内容が作成されるならば、障害の有無にかかわらず、保育内容を組み立てる視点と手順は同じであることを指摘し、従来の平均的発達を目安にして組み立てられるカリキュラムをもとにした保育実践の基本的態度に変革を促している。
中坪　史典 上田　敏丈	2000	統合保育場面における障害児を取り巻く人間関係	保 38-1, 45-52	統合保育場面における障害児をめぐる人間関係を、特に、障害が社会的不利となる文脈を捉えることにより考察している。その結果、保育所には、さまざまな規範・習慣、相互行為システムが存在し、それが発達遅滞の幼児の適応を困難にさせていることや、対象児への保育者の配慮がクラスの幼児の配慮の生成に役立っている反面、対象児への好まない干渉や注意をも生じさせていること、そして、対象児は、同じクラスに参加する重度の障害児に積極的に関わりを持とうとし、同時にクラスの中での自分の存在価値を見出していることなどを明らかにしている。
上田　敏丈 原三　智子 中坪　史典	2001	統合保育場面における障碍児のエスノグラフィー－障害の程度の異なる２人の幼児に着目して－	乳 10, 11-20	中坪・上田（2000）の発展研究。障害の程度が異なる二人の幼児を対象に、統合保育場面において、障害児がどのような文脈で「社会不利」を受けるか、エスノグラフィーを用いて解釈を行い、その一面を明らかにしている。
水内　豊和	2003	統合保育場面における障害児の「遊び」と「学習」－アメリカ合衆国における「自然主義的アプローチ」の検討から－	保 41-1, 95-102	障害のある幼児に対して「遊び」と「学習」の両方をどのように保障できるかを、どちらにも偏らず両方の利点を取り入れたアメリカ合衆国における「自然主義的アプローチ」を検討することによって考察した。
宇田川久美子	2004	「自閉症児の心の世界」への参入と統合保育における共生の可能性－「モノ的世界」と「ヒト的世界」の橋渡しを手がかりとして－	保 42-1, 59-70	自閉傾向のある男児（4歳児から5歳児）との2年間の保育実践を分析した。他者が人としてではなく、物理的変化を起こす道具として「モノ的世界」に参入することにより自閉症児とのつながりが結ばれたことから、統合保育における共生の可能性について明らかにした。
4－3　ジェンダー				
岡野　雅子	1999	家庭教育における性差－女子に対する教育についての10年間の変容－	保 37-2, 81-90	1987年と1997年に女子学生と幼稚園児の母親を対象として同一の質問項目による調査を実施し、それぞれから収集した資料を比較検討することにより女子に対する家庭教育の10年間の変容について考察している。その結果、男性性役割行動の奨励も女性性役割行動の奨励も共に弱体化する傾向にあった。この背景として、家庭教育における性差の縮小というよりも、むしろ家庭教育自体が弱体化しつつあることの現れと読み取っている。
中田　奈月	2002	「男性保育者」の創出－男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響－	保 40-2, 8-16	保育職における男性の存在が職場の人間関係にもたらす問題を検討した。保育職にもジェンダーの権力構造が存在し、人数の多少が男性を不利にすること、男性を有利にするはずのジェンダーの権力構造が、男性を保育の場から排除するよう作用することを明らかにしている。
菊地　政隆	2002	男性保育者に対する態度－女性保育者・保護者・学生からみて－	保 40-2, 17-23	男性保育者を女性保育者、保護者、学生がどう見ているかを解明するために、男性保育者役割尺度を作成した。それをもとに男性保育者のいる園、いない園における女性保育者や保護者、学生というそれぞれの立場で男性保育者に対する態度の違いを検討した。男性保育者がいるいないに関わらず保護者は、男性保育者を必要としている現状が明らかになった。
佐藤　和順 田中　享胤	2003	幼稚園教師の意識変化に着目したジェンダー・フリー・プログラムの効果－教師スタンスの分析を手がかりとして－	保 41-2, 40-49	教師が、ジェンダーに関する事前学習等を行うことで、教師自身の意識に変化が起こり、それに伴い教育スタンスもジェンダー・フリーの方向へと変化していくことを仮説として設定してその検証を試みた。ジェンダー・フリー・プログラムに参加した実験群の教師は性別役割観に関する意識に変化がおこり、男女平等の意識が高まり、それに伴い保育内容にも変化が現れたことから、教師がジェンダーに関する正しい認識を持つことの重要性を示唆している。
佐藤　和順 田中　享胤	2004	生活史的アプローチによる幼稚園教師のジェンダー観の揺らぎに関する研究－ジェンダー・フリー・プログラムを手がかりにして－	乳 13, 37-50	生活史的アプローチをもちいてジェンダーフリー・プログラムに参加した教師のジェンダー観の形成過程を検証するとともに、教師自身のジェンダー観の変化の認識を明らかにすべく調査、および、考察を行った結果、今回のジェンダー・フリー・プログラムは、対象教師にとってはジェンダー観を揺るがせる契機になったということがわかった。
4－4　虐待				
楢木野裕美	1998	児童虐待に関する基礎的研究－青年女子の内的ワーキングモデルと女性性－	乳 7, 47-54	アタッチメントの質の違いにより、青年女子の女性性に関する意識に差があるかどうかを検討した結果、アタッチメント傾向の質の違いにより、乳幼児に対してもつ感情、養育への態度や子ども性に差があることが明らかになった。このことは、児童虐待を予防していくにあたり、注目していかなければならないと指摘している。
楢木野裕美	1999	児童虐待に関する基礎的研究Ⅱ－妊婦の内的ワーキングモデルと親になることに対する態度－	乳 8, 95-102	第1報に引き続き、児童虐待における世代間伝達のメカニズムをさぐり、育児支援のあり方を見出すための基礎的研究として、妊婦の親になる態度について検討している。妊婦の内的ワーキングモデルの傾向を secure 群, ambivalent 群, avoi-dant 群の3群に分類し、親になることに対する態度について、内部構造の一部を明らかにし、3群による親になることに対する態度は、親のもつアタッチメントに質により差が見らることがわかった。
岩崎美智子	2003	子ども虐待に関する9つの発見－新聞記事の内容分析－	乳 12, 21-32	2001年1年間に新聞に掲載された子ども虐待に関する記事を対象に、虐待の全国的な実態を把握し、虐待が1日の中では、正午をはさんだ昼の5時間と夜間の6時間に集中している、などの幾つかの特徴を明らかにし、その防止策を検討している。

4−5　コンピュータ				
中坪　史典	1999	コンピュータが保育室にもたらす問題：保育者が抱く葛藤の様相	保 37-2, 47-54	コンピュータが保育室にもたらす問題を、保育実践の文脈の中で検討した結果、保育者にとってコンピュータは、必ずしも有用性ばかりが発揮されるわけではないこと、保育におけるコンピュータ利用と保育者が意図する保育実践との間には、幾つかのコンフリクトが生じる可能性があること、コンピュータはこれまでの幼稚園文化・保育者文化が経験したことのない未知の環境をもたらしていることなどを示している。
中坪　史典	2000	コンピュータがもたらす保育者と幼児の間のコンフリクト	乳 9, 41-50	幼稚園の「コンピュータ教室」における観察を通して、保育者と幼児の間のコンフリクトの様相を描出している。幼児はコンピュータの魅力を自ら見出し、コンピュータは、幼児に対して多くの充実感・達成感をもたらしている。しかしながら幼児のこうした充実感・達成感は、必ずしも保育者の意図とは一致せず、むしろ保育者によって制御されてしまうことを明らかにしている。
4−6　教育				
増田　吹子 横松　友義	2000	高度経済成長期における家庭の教育機能の変化に関する一考察－乳幼児教育研究を進める上で踏まえるべき本質的課題－	乳 9, 51-60	高度経済成長期における家庭の教育機能について、統計的なデータを含めた様々なデータに基づいて考察した結果、子育ての知恵の不継承・育児書への依存・家庭の学校化・家庭における父親不在等の問題の本質は、家庭の文化の継承機能の弱体化にあること、また、保育所保育や幼稚園教育の問題は、保育所や幼稚園の範囲の中だけで、考えられるものではないことを再確認するべきであることを提唱している。
小針　　誠	2001	小学校受験の準備教育と幼児の発達－その実態および影響について－	乳 10, 1-10	小学校受験の準備教育を開始した幼児にどのような発達上の変化が生じたのかを実態レベルで把握し、そうした変化が生活環境や受験準備教育のあり方とどのような関係にあるのか、また、幼児の発達上の変化が家族成員に与える影響についてを分析・考察した。その結果、小学校受験に向けた準備教育は、多くの幼児にとって、「肯定的変化」を引き出し、保護者の多くは受験準備教育を開始した後の幼児の変化をおおむね肯定的に評価していた。
伊藤　葉子	2004	中・高校生の保育体験学習の教育的効果		対児感情が良くない生徒の中にも、実際に子どもに接する体験を通して、子どもとの関係性に対する意識に何らかの変容が起こる可能性は高いとの考えから、この変容が体験過程におけるどのような要因と結びついているかを検討している。保育体験学習によって、中・高校生の「対子ども社会的自己効力感」が高まることなどを明らかにしている。
4−7　多文化・異文化・異年齢				
柴山　真琴	1995	ある中国人5歳児の保育園スクリプト獲得過程－事例研究から見えてきたもの－	乳 4, 47-56	5歳の時に親と共に来日しある公立保育園に入った一人の中国人幼児の適応過程についての事例研究である。ネルソンらによって提唱された「スクリプト理論」を理論的枠組として採用し、保育園スクリプトの獲得を考察している。
植田　　都	1996	異文化で暮らす幼児とその母親	乳 5, 73-84	異文化で暮らす幼児は母親の異文化社会への適応、対人関係、親の心的安定度に影響されることが大きいことを指摘している。また、親の適応過程は多様でその規則化は困難であるが、米国における日本人母親には日本人コミュニティーが適応促進の役割をはたしていることを示している。
藤井　穂高	1996	フランスにおける「初等教育としての保育」の問題構成	保 34-2, 41-48	「初等教育としての保育」が現実に成立しているフランスを例に取り、その成立過程の分析を試みるなかで、「初等教育としての保育」が統合と分化の両原理の対立・葛藤という問題から構成されるものであったことを明らかにした。
オムリ上野慶子	1996	イタリアにおける『国立母親学校の教育活動指針(1991)』－アガッツィ法とモンテッソーリ法の影響－	乳 5, 55-62	22年ぶりに改訂された『新指針』で、モンテッソーリ法ははたして正当な評価がされたのか、またアガッツィ法の影響はどうなのか、それぞれの影響を検討している。
埋橋　玲子	1997	変わりつつあるイギリスの幼児教育－プリヴァタイゼーションと日本への教訓－	保 35-2, 144-151	イギリス政府は国家認定資格の導入により教育現場に「見習い」のおとなを参加させることによって低コストでおとな対子どもの比率を高く保とうとしている。また、従来ティーチングは学位所得者によってのみ行われていたが、新しく導入される資格はアンダーセブンの子どもに対するケアとエジュケイションに関わるものである。低コストが期待できるが、このような資格者による幼児教育の質は、始まったばかりの試みであるためその成否は定かではないと述べている。
村知　稔三	1997	「ソビエト保育」の「脱国家化」過程の現状－ロシア連邦キーロフの場合－	保 35-2, 152-160	キーロフのケースから明らかになった現代ロシア保育界の動向は、①企業の民営化にともない施設総数は大きく減少している。②施設減の別の理由として入所児、とくに3歳未満児の数・率の低下がある。③入所児数・率の低下の背景に少子化の急激な進行を指摘できる。乳児死亡率の上昇や平均寿命の短縮という深刻な事態もみられる。④インフレと給与遅配などが加わり教職員の待遇は悪化している。⑤教育法の規定にそった教育・保育予算の配分は中央政府の急務であることを指摘している。
森　　眞理	1999	米国の多文化教育者養成に学ぶ－保育者養成における多文化教育の可能性を求めて－	保 37-1, 13-20	「多文化的アプローチによる幼児教育」の授業より保育者養成における多文化教育の在り方について考察している。多文化教育を実践する上で重要な「成因探究からの自分理解」「脱あたりまえ化」「共働型授業展開」が、一人ひとりの子どもが携えてくる背景を価値あるものとして受けとめ、それらを生かして実践できるようになる保育者への道標として捉えることを示唆している。
丸山（山本）愛子 丸山　恭司	1999	多文化教育の実践が保育者に問いかけるもの－アメリカの事例から－	保 37-1, 21-27	多文化教育の発祥の地であるアメリカにおける多文化教育の歴史的・社会的背景を整理し、多文化教育の特徴について明らかにしている。アメリカにおける多文化教育の現状の一側面から問題の所在を確認し、多文化教育を実践しようとする保育者にとって問題となるものは何かを検討した。

大藤　素子	1999	アメリカの多文化教育の実情と問題点	保 37-1, 28-34	テキサス州ヒューストンのプレスクール・小学校で教え、現地の多文化教育を体験した筆者が、自身の子どもを二人現地校に通わせた経験をもとに、アメリカでの多文化教育への取り組みと問題点、およびそれらが日本での多文化教育に示唆するものについて論じている。
宮内　　洋	1999	「多文化保育・教育」とクラス編成	保 37-1, 35-42	北海道のある私立幼稚園の一つの事例をもとにして、「縦割保育」と呼ばれる保育・教育形態が、「ニューカマー」の子どもにとっては心理的に負担の少ない環境である可能性を見出した。生まれた年度毎のクラス編成は、幼稚園内にすでに存在する〈複数の文化〉を隠蔽する働きをしているのではないかという問題点を考察し、「縦割保育」も「多文化教育」の一つとして位置づけて検討を行うことの可能性を指摘している。
廿日出里美	1999	保育所における異文化間の友だち関係の微視的分析	保 37-1, 43-50	日本語を母語としない子どもを受け入れている保育者のクラスにおいて自然に生起した友だちとの関わりを、子どもの解釈に沿って、分析している。異なる文化的背景をもった者同士が親密な関係を築いていくには、偶発的に起こることがらをきっかけに、保育者がそれを理解し、支援することが重要であることを示している。
爾　寛　明	1999	異文化理解とアイデンティティー形成の交差関係－保育行事の中の文化性の役割－	保 37-1, 51-58	保育行事を通じて子どもに異文化を体験させることは、文化的な分類分けがまだできない幼児期においても、文化的な差異に気付き始める時期であるため、違いに気付くようになる。このことは、将来における異文化理解にとって有効であることを論じている。
権藤　桂子 坂越　孝治	1999	幼稚園における保育者の国際交流研究プログラム	保 37-1, 59-66	相互交流型の国際交流を目指して、保育者のための国際交流研修プログラムを1988年から実施している大阪府の南港幼稚園（私立）の実践例を報告している。プログラムの開始から10年が経過した現在の段階で、これまでの実践の内容と成果を報告した。
植田　　都	1999	幼児の多文化教育への提言－国際学校（付属幼稚園）における観察より－	保 37-1, 67-74	多文化教育を促進していく要素としては、学校全体での多文化理解の態度、保育者のバイリンガル、多文化理解の肯定的理解、親の多文化体験への理解を、また、保育内容としては個人的な関わりと集団活動とのバランスが良くとれていることを挙げている。
丹羽　　孝	1999	韓国幼稚園教育課程改定の背景とその特徴	保 37-2, 91-103	韓国教育改革の進展と幼児教育への影響、また、韓国における教育課程研究の当面課題についての検討を行っている。幼児教育過程と発達理論の関係性の理解が、韓国幼稚園教育課程の領域の内容を「発達」から「生活」へ変化させた根拠であり、日本の幼稚園教育要領も、韓国の探求生活領域構想に学ぶべきことがたくさんあることを示唆している。
新倉　涼子	2001	外国人児童の保育への負担度および保育士の異文化理解の姿勢に影響を及ぼす要因の検討	保 39-2, 40-48	保育士が外国人児童を受けもって直面した問題の頻度、解決までの期間が、それらの問題に直面したときの負担度に及ぼす影響と、保育士の外国人保育に関する考え方や異文化理解への姿勢に影響を及ぼす要因を検討している。
朴　香　俄 諸　京　淑	2001	韓国における幼稚園教師の専門性を阻害する要因の分析	保 39-1, 69-79	幼稚園教師の専門性を阻害する要因を教師養成の体制の中から探った結果、幼稚園教師の修学年限の見直しや、教育過程に関する科学的な研究と比較教育学的な研究を通してより望ましい方向を模索することを提言している。
仲野　悦子 後藤　永子	2002	異年齢児とのかかわり－いたわりと思いやりの心の育ち－	保 40-2, 72-80	Ⅰ期からⅣ期に分けた年間計画を作成し、縦割り活動を通して「異年齢児とのかかわり」について研究した。その結果、対象園における異年齢児の交流は、年齢の違いがもたらす能力の差を保育の中で生かし、年少の子どもへの配慮を身につけていくような豊かな人間性を作る取り組みとなった。
柴山　真琴	2002	幼児の異文化適応過程に関する一考察－中国人5歳児の保育園への参加過程の関係論的分析－	乳 11, 69-80	対象児の保育園への参加過程を“共同生活者との関係作りの過程”として記述し、幼児の異文化適応の方向性と外国人幼児の発達支援のあり方を探っている。愛着対象者をみつけその人との関係づくりをすることで、保育園で居心地良く過ごせることや、日本語の習得は、「どのくらい上手に話せるか」という技法が問題なのではなく、日本語を媒介にした遊びをすることで友達との人間関係や社会的スキルを育て、ことばをやりとりすることで他者との絆を強めたり深めたりする点で重要だとしている。
大藤　素子	2002	アメリカの教育改革がキンダーガーテンの文字教育に及ぼした影響について－成熟論からイマージェント・リタラシーへの変遷－	乳 11, 11-22	アメリカで近年行われてきた教育改革の目的や問題点をさぐり、なぜアメリカはこれほどまでに子どもの学業成績向上にこだわるのか、それがキンダーガーテンプログラムにどのような影響を与えているのかを考察。幼児教育場面で実際に大きな影響力を及ぼしてきた成熟論、ＤＡＰ、ホールランゲージ理論とその問題点を探っている。また、新しい文字教育の形としてのイマージェント・リタラシーという概念を紹介し、その試みが教師たちのジレンマをどこまで解決できるのかを検討した。
埋橋　玲子	2004	イギリスにおける「保育の質」の保証－保育環境評価スケール（ECERS-R）の位置づけに注目して－	保 42-2, 92-100	ＥＰＰＥプロジェクト発足の政治的背景を示し、ＥＣＥＲＳ－Ｅ開発の理由とそのスケール自体の特徴を理解することにより、イギリスの政府が保育の質をどのように定義し、保証しようとしているのかも理解し、さらに、我が国において保育の質をどう保証するかという課題について示唆している。
4－8　幼小の教育的接続				
伊藤　輝子 山内　昭道 岩崎　洋子 細川かおり	1997	幼稚園・保育園・小学校の教育連携の実態と課題－来年度就学予定児を持つ保護者の不安に対する保育の課題－	保 35-2, 136-143	就学予定児を持つ保護者は比較的不安が高く、最も心配しているのは「友だち」であり、在園児保護者が入学前に身につけさせたいことは「話を聞く」「挨拶や返事」といった生活態度に関することであったことに対して、多くの小学校教師は入学前に「身辺自立」を身につけてほしいと考えており、在園児保護者との間に意識の違いが見られた。また、保護者は普段の生活や学習内容、進度、いじめ等に関して知りたいと考えていて、主に近隣、同園の保護者、子どもの兄姉から情報を得ていることなどが明らかになった。

高橋　敏之 木内菜保子	2000	自分と身近な自然・季節の変化・地域の生活とのかかわりを主題にした絵本と小学校生活科学習との関連性－先行体験としての幼稚園教育における絵本環境－	乳 9, 1-12	幼稚園と小学校の教育的接続を高めることを目的として、自分と身近な自然・四季の変化・地域の生活との関わりを主題にした絵本と小学校生活科学習との関連性を考察している。その結果、自然との関わりに関する絵本は多いが、季節の変化や地域の生活との関わりに関する概念形成を援助する絵本は少ないことがわかった。暮らしの工夫に関しては、一般的に雪国の生活の工夫が注目されていて、その他の地域の工夫はあまり意識されていないと考察している。
山平　真理 横松　友義 中川　智之	2002	幼稚園から小学校へのスムーズな移行を可能にするカリキュラム開発に関する基礎的研究－幼稚園と小学校の中間的存在としてのアメリカ・キンダーガーテンの事例的研究－	乳 11, 43-52	アメリカ・カルフォルニア州のキンダーガーデンに着目し、州のカリキュラムを取り上げて、その分析や考察と共に、幼稚園から小学校へのスムーズな移行を可能にするカリキュラム開発への示唆を得ている。
4－9　幼保問題				
山本　和美	2000	保育の質的向上を目指す幼稚園と保育所の関係について－イギリスの幼児教育と保育における提携－	乳 9, 71-82	イギリスの 1970 年～2000 年の動きに焦点をあてて考察した結果、子どものニーズに対応して、教育雇用省・保健省等の管轄の枠、公立・私立の枠、保育学校・保育所の枠を越えて、提携・統合が試みられていることがわかった。イギリスの保育提供の多様性、多元化とその提携計画のまとめが地方教育当局の責任下におかれた窓口一本化の過程は、わが国に貴重な示唆を与えているとしている。
諏訪　きぬ 強矢　秀夫 佐藤　洋子 野島　康子 榎田二三子	2004	乳幼児の発達保障と幼保問題－狭山市・日野市における「幼保意識調査」を手がかりに－	保 42-2, 158-167	幼保問題に取り組んだ経験のある東京都日野市と、日野市と条件の似ている埼玉県狭山市とを対象に、保護者と保育者の「幼・保意識」に関する比較を行い、幼保の課題の検討を行っている。その結果から、保護者には幼稚園・保育園ともに乳幼児が遊びたわむれ、しつけも受けて育てられる場というイメージがあるが、保育者のイメージは「幼稚園は教育機関」、「保育園は家庭に代わって養護する場」という制度的分断を色濃く反映していることが明らかになった。また、保護者は幼保一体的施設に対して約半数が肯定的であった。
山崎　　晃 楠本　千里 上田　七生 中川　美和 若林　紀乃 柴崎　良典 倉盛美穂子 鳥光美緒子 七木田　敦	2004	幼保一元化・一体化をめぐる諸問題－保育関係者はこの問題をどのようにとらえているか－	保 42-2, 168-181	幼稚園教諭及び保育所保育士と、保育者養成に関わっている養成者・教員が幼保一元化にかかわる問題をどのように認識しているのか、さらに、保育に関する信念についての意識調査を行っている。その結果からは、幼稚園教諭は、子ども中心主義をもつ教師の割合が多く、保育者保育士は、教師指導の信念タイプをもつ人の割合が高いこと、また、幼稚園教諭は、幼保一元化すべきであると考える人の割合が高いが、保育者保育士においては、一元化の賛否の割合に差がみられないことなどが明らかとなっている。
4－10　保育の危機				
日本保育学会共同研究委員会	2002	地域の実態研究委員会最終報告	保 40-1, 173-215	日本の乳幼児及び保育が直面している危機をどうとらえ、それに対処するか、という研究課題に基づいて、秋田地区・横浜地区・沖縄地区を対象に、共同研究に取り組んだ。この 3 つの地域はそれぞれの事情を抱えている。まず、秋田地区は、少子化・過疎化が急激に進み、保育施設の極端な小規模化から小規模施設における保育の在り方が課題となっている。一方、横浜地区は、急激な人口急増地帯をかかえ、保育施設に入れない“待機児”の数が全国で最高であるといわれており、全国唯一の国公立の幼稚園が皆無の都市となっている。また、沖縄地区では、アメリカの統治時代の制度の固着化があり、幼稚園はすべての小学校に併設されている 5 歳児だけの 1 年保育であり、保育時間は 4 時間であるため、5 歳児の午後の生活が問題となるが、必ずしも適切な対策が講ぜられているとはいえない。これらの課題の異なる地域において、アンケートやインタビュー、また、実地の観察などを取り入れて、実態研究を深めている。
日本保育学会共同研究委員会	2002	保育基本問題検討委員会最終報告	保 40-2, 155-183	3 年間にわたり、乳幼児や保育の実態、また、保育の基本的な考え方などについて、各委員が様々な資料をもとに検討を重ねてきた。今回の報告では、「保育の本質と保育施設の在り方の基本を考える－現代の乳幼児の危機にあたって－」、「今日の乳幼児の危機と保育の課題」、「今、子どもたちに育てたいものと保育施設の役割」、「国及び地方自治体等で進行している保育施設の具体的検討」、「諸外国の保育に学ぶもの」、といったテーマから、保育における基本問題の検討を行っている。
5　保育の歴史研究				
米村　佳樹	1995	20 世紀初頭の英国における家庭保育原則と保育所	保 33-2, 8-15	20 世紀初頭の英国における保育所の公的保障や基本的性格、実態などを当時の保育原則に照らし合わせながら究明している。当時の保育原則は家庭保育を第一とする家庭保育原則であり、母親の労働に積極的な意義を認めない、「女性の居場所は家庭にある」とする女性観を基盤にしていたことなどを明らかにしている。
是沢　博昭	1995	明治前期に於ける幼児教育の普及と啓蒙	保 33-2, 45-52	明治 20 年代は「家庭」という言葉が流行し、江戸期の封建的な「家」の概念が後退をはじめ、近代的な「家」が成立をはじめる時期であったこと、また、やがて明治 30 年代の終わり頃から「家庭教育」が 1 つの流行語となり、児童用品の改良等が広い視野で試みられたことなどをを明らかにしている。
田中まさ子	1995	大正期芸術教育運動における幼児・小学校低学年児童の表現－『コドモノクニ』の自由画の入選・佳作を軸として－	乳 4, 79-90	大正期芸術教育運動の興隆期に創刊された幼年向け絵雑誌『コドモノクニ』に自由画を応募して入選・佳作となった子ども達の属性や表現内容、それに対する選評などの分析を通してこの運動における幼児の表現活動の特色を考察することを目的としている。またその作業を通して、子どもの創造的な表現を引き出す上で子ども向け雑誌が果たした役割を考察している。

久保由美子	1996	保育所・幼稚園における教育遊具としてのパズル式双六の開発	乳 5, 35-42	室内遊具として最古のものと言われる双六の歴史を概観することによって、伝統的な双六のよさを見直すとともに遊具としての限界を明らかにし、新たな双六の構想、開発を目指し、従来の双六の問題点を検討し、遊びの発展性のある教育遊具という視点から、パズル式の双六を開発した。
西川ひろ子	1996	野上俊夫と大正期のモンテッソーリ教育法	乳 5, 63-72	野上俊夫は、モンテッソーリ教育法における児童中心主義の自由教育と早期教育的効果をもたらすその具体的な方法論を積極的に取り上げたこと、また、モンテッソーリ教育法の自由教育に対する野上の認識が、他のモンテッソーリ教育法紹介者たちとは異なっていたことに注目している。
村川　京子	1996	絵雑誌『お伽絵解こども』と明治期の大阪の幼稚園	乳 5, 85-94	日本の最初の彩色絵雑誌と、幼稚園の保育内容との関係はどのようなものであったのかを、主として、「お伽絵解こども」の創刊から一年間の内容を通して考察を行っている。
柴崎　正行	1996	明治・大正期の幼稚園における『遊戯』の位置づけの変遷について	保 34-2, 57-64	明治・大正期の幼稚園の幼稚園の保育実践における遊戯の位置づけの変遷についてを当時の保育実践者による実践資料から探っている。明治 30 年代前半には、自由遊戯は課題間や終了時に気分転換のために短時間だけ実施されていたが、後半には、自由遊戯の価値が次第に保姆に自覚され、自由遊戯の時間と機会が次第に拡大されていき、大正初期になると、自由遊戯の重要性は理解され、戸外遊戯だけでなく日々の保育実践全体の中に取り入れらえるようなったことがわかった。
笠間　浩幸	1996	わが国の幼児教育施設における〈砂場〉の歴史	保 34-2, 49-56	わが国における砂場の発達及びその起源についても歴史的に考察した結果、日本の幼児教育施設における砂場は、明治 30 年代半ば以降に普及が進み、大正 10 年頃までには当然ともいうべき遊具になったことが明らかになった。
米村　佳樹	1996	20 世紀初頭のわが国における幼稚園観－幼稚園可否論争を通して－	保 34-2, 65-72	当初、幼稚園は下流・上流階層の幼児に必要と考えられたが、都市化に伴う遊び場や仲間の減少、子どもの発達原理・幼稚園教育に対する認識の広がりなどを背景に、幼稚園は、中流階層も含め、幼児にとって必要な家庭教育の補完機関であるという考えへと変容してきたことが明らかにしている。
丸尾　　譲	1997	マリア・ベルテとフレーベル主義幼稚園の成立に関する一考察	幼 6, 1-12	1870 年代、アメリカにおいてフレーベル主義幼稚園の普及をめざして活躍したマリア・ベルテのモデル幼稚園の保育と、幼稚園教師の養成の実際から、アメリカにおいてフレーベルの幼稚園教育の理論と実践が定着した過程を考察することを目的としている。
荘司　康弘	1997	乳幼児のフレーベル教育遊具－ボールを中心に－	幼 6, 13-24	フレーベルの第 1 遊具の紹介と調査を行っている。
齋木喜美子	1997	儀間比呂志の沖縄民話絵本に関する研究－「再話」の手法を軸として－	幼 6, 25-34	これまでの「再話」に関する研究の知見、および沖縄地方に伝わる民話のルーツを文献研究法により整理し、その結果をもとに、現代における「再話」の意味を明らかにすること、また、そこで示唆されている問題点を集約し、儀間比呂志の沖縄民謡の再話においてどうであるのかを分析することを目的としている。
小澤　文雄	1997	保育者の資格に関する法制の変遷－明治・大正期を中心として－	保 35-2, 118-125	明治・大正期の保育者養成制度の構造を探る第一歩として、法令の規定を分析し、各法令において保育者の資格がどのように規定され、整備されていったのか、その変遷の過程を明らかにするとともに、それらはどのような問題点を含んでいたのかを検討している。
是沢　博昭	1997	明治期の幼児教育政策の課題と変容－教育対象としての子どもの誕生－	保 35-2, 126-135	簡易幼稚園奨励の意図はどこにあり、なぜその方針は変化するのか、また、この規程によって、幼稚園と保育園との分化が生じ、結果的に前者は教育機関として、後者は福祉施設として制度化される原因となったというこれらの問題の経緯を掘り起こすことを目的としている。
瀧川　光治	1998	福沢諭吉と科学教育－子どもへの近代的科学観の啓蒙－	乳 7, 35-46	科学教育史研究および科学読み物・絵本史研究においては、福沢諭吉は、その胎動期を代表する人物であり、また、その著『(訓蒙) 窮理図解』は科学読み物・絵本史の起点であり、その科学思想は「窮理学」「万物主義」に代表されると述べている。
椨瑞　希子	1998	マーガレット・マクミランの初期保育思想	保 36-2, 8-15	マーガレット・マクミランの自伝と評伝に基づいて若き日の姿を描き出し、1990 年の著書『幼児期』とそれに続く 1904 年の『想像力による教育』およびその前後の小文を取り上げて保育思想を読み解き検討を行っている。
安齊　智子 柴崎　正行	1998	幼稚園創立期における保育内容の確立過程について	保 36-2, 77-86	幼児保育施設の設立期において、地域によってその保育内容に違いがあったのかどうか、またそうした違いは地域の社会的な要因や小学校教育とどのように関連していたのかについて検討を行っている。
福元真由美	1999	志賀志那人のセツルメントにおける北市民館保育組合とその保育	保 37-2, 8-15	志賀が、北市民館保育組合を設立した経緯を明らかにし、保育組合における保育の意味と人々の協同関係のあり方を考察することを目的としている。
辛　椿　仙	1999	和田実における「幼稚園論」の形成過程とその意義	保 37-2, 16-23	和田実の全体像に迫るべく、和田の「幼稚園論」を取り上げて、「幼稚園論」がどのように形成されたかを探り、その意義について考察を行っている。
辛　椿　仙	1999	和田実の「幼稚園論」－幼児教育理論と実践の関係－	乳 8, 43-52	和田の著作を中心に幼児教育理論を検討し、彼の「幼稚園論」における幼稚園教育の実践に焦点を当て、理論がどのように実践に生かされていたかを把握し、和田における幼児教育の理論と実践を明らかにすることを試みている。
村知　稔三	1999	保育時間を通してみた幼児の養育の「社会化」問題－第 1 回全ロシア就学前教育大会（1919 年）の論議から－	乳 8, 21-32	幼児の養成の「社会化」、つまり社会的（公的）保育が誕生・成立するさいの契機・要因は何か、という問題の考察を行っている。

劉　蓮　蘭	1999	陳鶴琴の「活教育」思想	乳 8, 11-20	陳鶴琴の「活教育」思想、「活教育」の実験と実践を紹介し、「活教育」の優れたところと欠点の分析を行い、近年に行われている幼児教育改革への影響を考察している。
西川ひろ子	2000	大正期におけるモンテッソーリ教育法の受容－モンテッソーリ教具を中心に－	保 38-2, 8-16	わが国におけるモンテッソーリ教具の製作販売の経過、製作されたモンテッソーリ教具の内容分析、およびわが国におけるモンテッソーリ教育法受容史の特質を明らかにすることを目的としている。
村知　稔三	2000	1910 年代末のロシア共和国における保育者養成制度の構想と実際－長期課程と短期課程の関係－	保 38-2, 57-67	長期課程をもつ養成所における相対的に良質な保育者の育成と、数ヶ月程度の短期課程である講習会における大量の保育者の緊急な供給という保育者養成政策の矛盾を、1917 年秋に誕生した直後のロシア共和国の保育界に即して解明を行っている。
福元真由美	2000	高崎能樹による阿佐ヶ谷幼稚園の設立とその意味－郊外における母親教育と子どもの保育－	乳 9, 31-40	阿佐ヶ谷幼稚園の設立の経緯を明らかにし、幼稚園を中心に母性を掲げて展開された母親教育と幼児教育について検討を行っている。阿佐ヶ谷幼稚園は、郊外に成立した幼稚園の中でも母親教育において際立った特徴を見せていることがわかった。
喜舎場勤子	2001	沖縄県那覇高等尋常小学校附属幼稚園の設立に関する一考察－1879 年頃から 1893 年頃までを中心に－	保 39-2, 8-14	沖縄県における初の幼稚園は 1893（明治 26）年に附設された那覇高等尋常小学校付属幼稚園であるとされているが、なぜこの時期に、またなぜ同小学校へ附設されたのかを分析することで、沖縄県初期の幼稚園の設立が当時の社会でどのような意味を持っていたのかを明らかにすることを目的としている。
福元真由美	2001	東京帝国大学セツルメント託児部における地区別グループの実践－鈴木とくによる保育と母親の共同－	保 39-2, 32-39	東京帝国大学セツル託児部の地区別グループによる実践を用意したセツルの状況を明らかにし、鈴木の実践記録の検討を中心にして保育における幼児の自己形成と人間関係の再編、および保母と母親が協同関係を形成する過程を考察している。
柿岡　玲子	2001	東基吉の幼稚園教育論の研究	保 39-2, 15-23	明治後期に新保育法を提唱した東基吉の課題意識をとらえ、東の主張する幼稚園教育の意義を明らかにし、それに基づいた保育者養成問題の検討を行っている。
志村　聡子	2001	倉橋惣三における「家庭教育の脱学校化」論－都市部の「受験家族」への指導に着目して－	保 39-2, 24-31	倉橋惣三が“家庭の学校化”傾向に歯止めをかけるために展開した教育論を明らかにすることを目的としている。
栗原　直子	2001	賀川豊彦の『死線を越えて』の保育学的分析－スラムの子どもを中心に－	乳 10, 65-72	賀川の著作である『死線を越えて』を保育学的に分析し、彼の保育の思想の原点を明かにすることを目的として考察を行っている。
瀧川　光治	2002	堀七蔵の保育項目「観察」教育論－領域「環境」の保育史の視点から－	乳 11, 81-96	領域「環境」の保育史に関する筆者の一連の研究の一つであり、とくに堀の保育項目「観察」の教育論について分析を行っている。
那須川知子	2002	遊戯作品にみられる動きのリズムの変遷に関する研究－明治期から昭和前期まで－	保 40-2, 57-63	明治期から昭和中期にかけて生み出された唱歌遊戯作品を対象とし、主に身体の動きの表現のリズムのあらわれに着目し、その特性を明らかにするとともに、唱歌遊戯がわが国の身体表現教育に果たした役割と意義について考察している。
小田倉　泉	2002	ヤヌシュ・コルチャックの「子どもの現在」への一考察	保 40-2, 31-38	ポーランド系ユダヤ人の教育者、ヤヌシュ・コルチャックの思想の中でも、とりわけその子ども観における「子どもの現在」への視点は今日的にも、多くの示唆に富んでいることから、ヤヌシュ・コルチャックの子ども観、時間的概念、子どもの現在性について論じている。
西脇　二葉	2003	愛育会による保育所保姆の養成	保 41-1, 88-94	保育所保姆の養成の黎明期における保育所保姆養成の特質を、愛育会の保姆養成の実践内容の分析（1934～45 年）より明かにした結果、愛育会が当時の日本において保育所保姆養成について新たな枠組みを提示した意義は大きいと示唆している。
田中　友恵	2003	戦前日本における幼稚園保母検定制度の確立	乳 12, 33-42	戦前日本における保母検定制度の確立過程を明らかにすることを通して、それが保母の「専門的教育職」としての確立に果たした役割について考察を行っている。
是沢　博昭	2004	恩物批判の系譜－中村五六と付属幼稚園分室の再評価－	保 42-2, 17-24	恩物批判の系譜を、積み木（第 3 ～ 6 恩物）に焦点をあてて検討することで、分室及び中村五六の役割を再評価し、それが後の「設備規程」や恩物批判などの保育内容に及ぼした影響を明らかにすることを目的としている。東基吉の恩物批判は、中村五六を中心とする附属幼稚園分室の保育実践によって地道に育まれた成果であったと述べている。
塩崎　美穂	2004	「公立託児所」成立期再考－近代日本における公的保育思想－	保 42-2, 71-79	現代の保育事情において、公共の営みとしての育児について、より根源的な視点に立ち返って考えてみる必要性を呼びかけ、日本における公的保育事業の思想史的研究を試みている。
田甫　綾野	2004	昭和 31 年版幼稚園教育要領に対する保育者の受けとめ方－ライフストーリーにみられる保育者の日常的「構え」を通して－	保 42-2, 80-91	なぜ当時の保育が「小学校的」と評されることになったのかについての考察を行い、保育者が制度や理論を解釈し、それを実践する際には、彼女たちのもっている保育観や保育に対する日常的な「構え」が影響しているということを論じている。
福元真由美	2004	1920 － 30 年代の成城幼稚園における保育の位相－小林宗作のリズムによる教育を中心に－	乳 13, 51-60	小原国芳の「学校村」における成城幼稚園の成立と小林宗作のリトミックによる幼児教育の特徴を明らかにし、1920-30 年代に郊外で産出された幼稚園の教育言説および実践について考察を行っている。